

3759
Y019
資料室



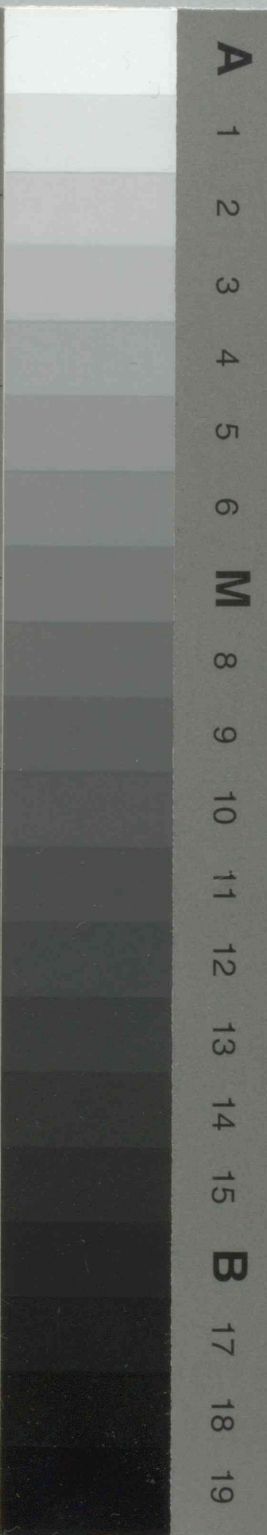
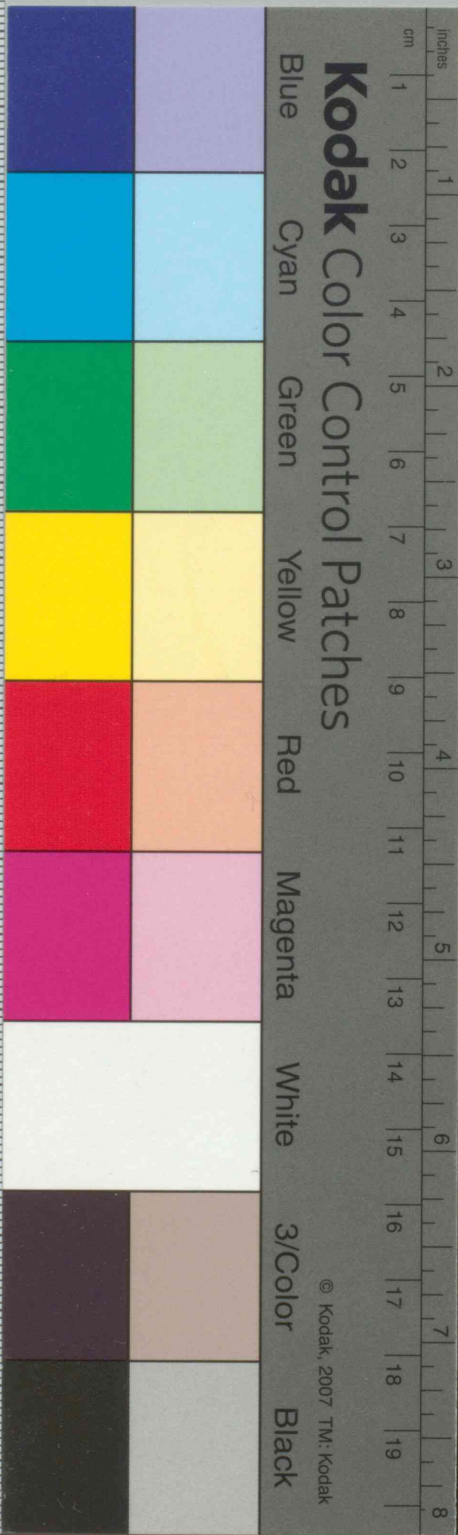
第一部用

卷八

東京
光風館藏版

教
5
200

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42626

教科書文庫

4
810
51-1931
20000 54279

資料室

教科書文庫
4
810
51-1931
2000054279

文部省檢定

昭和六年二月四日 師範學校國語教科用

375.9
Y019

吉田彌平編

師範國文 第一部用

卷八

東京 光風館藏版

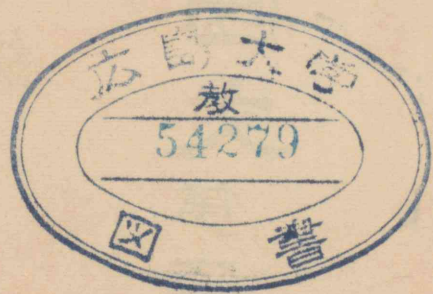
広島大学図書

2000054279





筆崖芳野狩 像音觀母悲



師範國文第一部用卷八

目次

一	國文學の研究	藤村作	一頁
二	月の前	上田秋成	二三
三	歌人西行	藤岡作太郎	三〇
四	山家金槐集鈔		三〇
五	名残の星月夜	坪内逍遙	三四
六	奥の細道	松尾芭蕉	三七
七	初時雨		三九
八	芭蕉と去來	小宮豊隆	六六

九	俚諺論	大西	祝	壹
一〇	借家大将	井原	西鶴	六
一一	馬追三吉	近松	門左衛門	五
一二	西鶴と近松	佐々	醒雪	一〇六
一三	狩野芳崖	岡倉	覺三	二三
一四	藤原道長	〔大	鏡〕	二三
一五	法成寺の造營	〔榮華物語〕		二六
一六	世界の四聖	高山	樗牛	一三
一七	クリトン	久保	勉	一四
一八	學の話	得能	文	一五

目次終

師範國文 第一部用 卷八

一 國文學の研究

藤村 作

藤村作
 國文學者
 東京帝國大學教
 授
 文學博士
 明治八年佐賀縣
 生

我々日本國民に取つて生命の糧であり力であるものは國文學である。取出してもく盡くることなく、一時代から次の時代へと絶えず我々の内的生活に糧を供してくれる寶庫は、我が二千年來の國文學である。我々は國文學を知り、國文學に親しむことによつて、常に日本國民たる生命を新にして行くことが出来る、眞の日本國民として反省と自覺との機會を與へられてゐる。我々は生まれて日本民族である、日本國民である。何とし

ても他の民族ではあり得ない、又他の國民ではあり得ない。それは偶然に日本といふ國土に生まれたが爲ではない。日本民族の血を引き、日本國民の生命を生命として享けてゐるからである。血は争ふべからざるものである。血によつてなされてゐる國民の結合は無機的な結合ではない。有機的な結合に成れる國家は機械的な國家ではない。争ふべからざる血は特殊なる民族性を作り、民族精神を作り、この民族性・民族精神が有形に又無形に國家を形成してゐる。日本民族を以て日本國を成してゐる我々日本國民は最も恵まれた國民である。我々は日本民族として生くる外に生くべき道は見出し得ない。而して國家によつて民族共有の生命の實現に努め、民族精神を世界に擴充するを圖ることが、我々の個人として又國民として生くべ

き唯一の道である。

國民の文學は國民の精神をさながらに寫した鏡である。かるが故に英吉利文學は英國國民に取つて最も尊い文學である。佛蘭西文學は佛國民に取つて最も大切な文學である。獨逸文學は獨國民にとつて最も愛すべき文學である。我々日本國民にとつては、日本文學の外に、世界の何處にもより以上に尊い大切な愛すべき文學はあり得ない。我々は自己の生命を他人のそれに比較してこれを評價するやうな自己に冷酷な所爲はしたくない。我が國民精神の表現である國文學を外國文學に比較はしても、その價值の比較には及びたくない。よしそれが高く評價されようと、安く評價されようと、國文學は我々日本國民の爲には唯一のものであり、如何ともし難いものである。我々は

その本質を究め、益、これを充實せしめ展開せしめることに努めればよい、又それより外になすべき道は持たない。我々は我々に生命の力を與へてくれる二千年來の歌人、物語作者、隨筆日記の筆者、軍記物語の著者から、近世の各種様式の文藝の作家たちに心からなる尊敬を捧げたい。そしてそれと同時に古典文學の筆寫、蒐集、整理、訓點、註釋、批評の業に従事して、我々に古典文學に親しみ得べき便宜を與へてくれた國文學者たちにも同様の敬意を保ちたい。

文學に國境は無いやうに言ふ人もある。或程度までは承認されるべきことである。併し一面からいへば、民族的、國民的の血の色の鮮かなものは文學である。國語は國民の内にその機能を全うするばかりでなく、その國語を解するものには外國人にも

同様にその機能を盡くし得る。とはいへ、單語、文章の持つ意味はとにかく、その中に脈打つてゐる全精神を些の遺漏なく理解し得るものはその國民を措いては決してあり得ない。かるが故に英吉利文學は英國國民をして研究せしめ、佛蘭西文學は佛國民をして研究せしめ、獨逸文學は獨國民をして研究せしむるが最も適當であることに論はないが、民族關係の複雑であり、國際交渉の古來久しく、國語組織の甚だ相似た西洋諸國民の間に於ては、外國人で他國文學を研究することも妨ないかも知れない。併し、我々のやうに特殊な民族性を有し、特殊な國家を有し、世界の國際關係から久しく隔絶されて特殊な生活を營んで來た國民の文學、系統を異にした特別な組織を持つてゐる國語に表はされた文學は、特に國民的の色の鮮かなものであることは言ふ

までもない。随つて我が國文學の研究は獨り我々日本國民のみ成し得べき業ではあるまいか。

我が國民の過去を振り返つて見ると、亞細亞大陸地方から支那や印度の先進文化を始めて我が國に輸入したのは甚だ遠い昔のことである。その時代に於ては我が國民はまだ素樸の情態に在つたから、彼の國の文化の燦爛たる光輝に接しては驚異から羨望、崇拜の心を向けて、熾にこれを輸入し模倣した。内なるものを省みて、よくこれを育みそだてるに違なく、彼に學ぶことに務めた。制度に於て、服飾、家屋に於て、藝術に於て、彼の影響感化を受けた所は甚だ多かつた。學問、思想、文學に至るまで追隨と模擬とに力を致してゐた。これが爲に當時の文化は國民の獨創力の甚だしく缺乏したものと成つてゐた。かくして國家を

支配した政治の實權は貴族階級から武士階級へ移り行き、王朝時代、武家時代と時代は變り行いたが、外國崇拜の精神は絶えず續き、拜外の迷夢は依然として國民の間に覺めなかつた。

偶、江戸時代に至り、徳川幕府は外國交通の道を杜絶したけれども、多年彼の感化を受けてゐた國民は相變らず拜外の夢を貪つてゐたが、その時代の精神の中からゆくりなく復古の聲が聞え出した。「古に復れ」といふ聲が天籟の如く國民の耳朶に響いて來た。復古の精神は昔のままの社會を再び此の地上に現さうとする精神ではない。古代の素樸な精神の中に人間の眞精神を見出し、日本人の眞の相を見出して、それに復らうとする精神である。長い年月の間に知らず識らず人間性の眞から離れて來てゐる生活を自覺的に本來の人間性に引直さうとする精神

古に復れ
 白雲中心を教と地朴
 草直清浄事の
 古代りも受のた美し
 精神ももう一ふ現れ
 によめる
 する

萬葉集
此林のあり、年直、清、
その日、平、白、宮、中、心
神、を、崇、祀、の、思、想
昔、の、中、に、溢、れ、て、わ、る

である。外國他民族の感化影響の爲に晦まされたものが民族固有の精神を發揮しようとする精神である。古に復れといふのは、人間本然の性に復れ、民族本然の相に復れといふのである。賀茂真淵は人間の眞の精神を萬葉集に見出して萬葉集の研究、萬葉風の和歌を提唱し實行した。本居宣長は日本人の眞の相を古事記に見出して古事記傳の著述にその生涯の大部分を捧げたのである。
これら先覺の提唱や實行によつて拜外の迷夢は一部破れかけたのであつたが、江戸末期に至つて、外國の要求に迫られて已むを得ず、當局は鎖國の制を撤廢して、こゝに西洋諸國との交通が開かれた。こゝに於て、西洋文化を我が國民の眼から掩うてゐた幕は切つて落されて、我が國民は再び外國文化の光に眩惑さ

れてしまつた。國際的地位を高め、國力を増進して彼等と世界に對立するには、先づ彼等の所有するものを我に得なければならぬと知つた敏捷な我が國民は、一千餘年前の國民がなしたと同じやうに外國文化の輸入模倣に努力した。さうして今日に於ては最早その點では多く彼に劣る所なきまでに漕ぎつけたのである。拜外の精神は對象を異にして又熾に動き始めた。かくて夢から夢へと移り來つて、今日なほこの夢を續けてゐる。此の夢の中に明治大正の六十年は過ぎて來たやうな感じかする。
世界大戰はいろ／＼の意味で世界の劃期的大事件であつた。此の事件に覺醒され刺戟されて起つた改造の氣運は、今や世界に充滿して各方面の改造今現にその途上に在ると見ゆるので

ある。西洋文化の真相が此の大事件によつて遺憾なく暴露されて、これに對する批判の眼が冷かに輝き始めた。そして明らかにその弱點を認識するに至つたのである。それと共にこれまで多く閉却されてゐた東方文化が世界の注視の的とならうとしてゐる。物質的から精神的へ、分析的から綜合的へと學界の推移し行かうとする傾向が見え出して來た。數年前から西洋學者の東洋研究・日本研究に向ふ傾向はこれを語る事實である。

今や世界國際の關係國民の交渉は實に近く且密である。一隅を叩けば他の隅々へ直ちに響を傳へる。我が國に於ても時を同じうして、各種改造運動と共に古典復興・國文學研究の風潮が何處からともなく起つて來た。拜外の迷夢は先づ若い人たち

東洋文化
精神
物質的
分析的
綜合的

の中から覺めかけて來た。老年たちが無自覺に拜外の鈍い空氣の中に逡巡して、舊習舊慣の保守に腐心してゐる中に、却て若い人たちの中に自覺的な活動・思索がいろ／＼と起りかけてゐる。改造の聲の中に、外國の束縛を脱して、自國民の生命を擴充して行かうとする聲が聞かれる。この強い精神は、老人たちの中でなくて若い人たちの中に聞かれるやうになつた。自國を凝視し、日本國民自身の眞の相を見出さうとしてゐる熱意は、確に若い人たちの中に動き始めたものである。この熱意は、少數専門學者の提唱・宣傳に基づく一時的の現象ではあるまい。それは若うして西洋文化の研究に功を積んだ人たちの間に、かゝる氣運の動いてゐる事實に徴しても知ることが出來ると思ふ。此の氣運は、これを一言に纏めれば復古精神の勃興である。「古

に復れ「日本國民のその元に復れ」外國精神の束縛を脱せよ」といふ精神である。荷田春滿や賀茂眞淵が二百年前に唱へ出して、本居宣長や平田篤胤に繼承されて、大いに國民を警醒して、明治維新の大業を成就した根本を培養した精神である。それが今こゝに又繰返されてゐるものといへる。江戸時代の復古主義者には世界知識の狭かつた爲に固陋な偏見に捉へられた弊があつた。今日の復古精神には此の如きものを含んではならない。復古精神は舊い者の社會や生活をさながらに今日に移さうといふのではない。古代生活や古代文化の中に見出される人間の眞の精神、日本國民の眞の相に復歸しようとする精神であらねばならぬ。因襲の世界から本然の世界へ、いびつの世界から正しき世界へ、虚偽の世界から眞實の世界へ復らうとする

「三」の「復れ」の語は、
後古精神を知り
人間の本質、
その心をわきまを
とる

その年の
空想性 物性性
を認めるに
あつた
いつまでも
いつまでも
いつまでも

上田秋成
國學者
餘齋と號す
大阪に生まれ京
都に住む
文化七年(1840)
年七十八
文治その年の年
文治二年(1845)
鎌倉の大將
右近衛大將源賴
朝
鶴が岡
神奈川縣相模國
鎌倉町鶴岡八幡
宮

精神であらねばならぬ。而してかゝる人間の眞の精神、日本國民の眞の相はこれを古典文學の世界に見出すべく、本然の世界、正しき世界、眞實の世界はこれを見出すべきであるから、復古精神には古典への憧憬、國文學探究の精神の伴なふを常とするのである。(日本文學講座)

二月の前

上田秋成

文治その年の年八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々、御前おひ、御あとべつからまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず遅からず、つらを亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、かしこみたいまつれる人數多あるに、御前拂ひして、あなただにいはせず、

二月の前

三

穴熊の
西伯將獵之曰非龍非
影非熊非
熊所獲霸王之
輔果過三呂尙
於渭水之陽
(史記)

城と屋敷
ヲヤハシク
ヲヤハシク

藐姑射の山
藐姑射山有神
人居焉肌膚
如冰雪綽約
若處子(莊子)
仙人の居る山
轉じて仙洞御所

世にいかめしく貴き御有様なり。かへりまをし、て御手輿に
召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏まりをる法師のあなる
が、見上げ奉る面つき、なほ人ならずと思しけむ、御輿ぞひの若侍
して問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたる様して、雲水にありか
定めず侍るものにて、名は圓位と申すといふ。聞し召されて、さ
ればこそ聞知りたれ。穴熊のたけき獲物の類ならで、賢き人得
たるためしに、誘ひかへらむ。わがあとに連れて來れ。とて召連
れさせ給へり。
御館に入らせられ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶら
數多照らしかゞやかせ給ひて、おまし近き處の一間なる簀子に
召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔藐姑射の山の宮仕せし
人の、世をはかなきものに思ひなして、身は黒うやつれたれど、月

大風起り

大風起り、雲飛揚、威加、海内、分歸、故郷、安得、猛士、守四方、漢の高祖

花のなげきの譽は、もの心なき東人さへ聞知りたるぞ、弓取る
人の本の心の猛きには、よむ歌も直くあからさまにと聞くはま
ことか。武士のあらゝしき心には詠みうつし得まじきもの
に宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛鼓の音、馬の
いなゝきは物とも思はぬを、この三十文字あまりのまなびには
心の後るゝはいかに。「こはかしこき御心にも思し惑はせ給ふ
ものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき弓矢執らして、軍に立たせ
給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高し
とこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まんとては、益荒雄心をとり隠
し、あてになよびかに詠みうつすべくするこそ、この道のいみじ
き煩なれ。君が御心のとくたけきまゝにうちいで給はむには、
今の人誰かは立ち並び奉らむ。三尺の劍を執りて、大風起り、雲

烏鶺南にカニニ

月明星稀烏鶺南カニニ
飛(魏)の曹操

遠つ祖

西行は藤原秀郷
九世の孫佐藤義清

飛揚す。とうたひ、藥をよこたへて、烏鶺南に。と詠ぜし君たちは、鞍の上にて、文に遊ばせ給ふならずや。と云ふ。「人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれどたのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは世にいみじき弓矢の上手となむ聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。」こは益、恐ある御問はせなり。つは者の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にさへ物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向ひ奉りては、をこがましく家の傳なりなど、聞え奉るべうも覺えはべらず。ましてありがたき大宮仕をいなみ奉り、親のいつくしみをさへあだなるものにして、年纔かに二十三にて家を出でたるいたづら者の、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。

疽を病めるを
吮ひ
衛の呉起の故事
竈を滅し
齊の孫臏の故事

たゞ一言の忘れがたきは、賞を重くし、罰を軽くせよ。といひしと任ずる者を辱むれば危し。といひしとのありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、まことの情よりも覺え侍らず。竈を滅して、人を危きに陥るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め、天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出したまへることの、あやしきまでかしこくませるを、餘所ながら聞き奉るには、この御問ゆるさせ給へ。とて、額を板敷に摺りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してむ。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ばむ。まれ人は酒飲まざるべし。鹿猿のなかに立交りて、歌よめといふともよむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷かなるにも飽

心なき身
心なき身にもあ
はれは知られけ
り鴨立つ澤の秋
の夕暮(西行)

藤岡作太郎
國文學者
文學博士
東京帝國大學文
科大學助教授
石川縣金澤市生
明治四十三年歿
年四十一

三 歌人西行

藤岡作太郎

度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、我が佛の冥福といふものを、生まれ得させむ。ただ悲しむべきは、神の御裔のこの後やうく衰へさせ給はむ世の姿なるは、とて、涙とゞめ難くして物語りしとなむ。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずもうちひそみぬべし。
（上田秋成全集―藤篋冊子）

山家集
二卷
西行の家集

北面
院の御所に仕へ
る侍

憲康
傳未詳
鳥羽殿
京都の南八軒下
鳥羽にあつた院
の御所

ずと雖も、山家集の一書は尙如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に噴々たるは、抑、何が故ぞ。西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど、義清は名利を喜ばずして常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せんとて約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ねれば、殿は昨夜頓死し給へり。とて、若き妻、老いたる母の、重なり伏して歎くに、義清は惕然

嵯峨
京都の西の山里

として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄^て恩^入無爲^はは如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがれるを思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つはじめぞと顧みもせて家を遁れ出て、嵯峨に至りて剃髮



西行法師
(湖龍齋筆)

保延六年
崇徳天皇の御世
(1100)
右幕下
右近衛大將源頼朝

せり。と。かくて、名を西行または圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に参り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見参し、進みて奥州に至り、

大師

弘法大師

桑門

梵語

Sramana

出家して修

行する者

抖擻

梵語

Dhūta

頭陀

衣食住の欲

を捨てるこ

と

高尾

京都府山城國葛

野郡高尾山神護

寺

文覺

俗名遠藤盛遠

高尾山神護寺の中

興

法華會

法華經を講説し

讚歎する法會

西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし」と。一個の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、優游自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み、弟子に告げて曰く、「遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事あるべからず。數寄を立て、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし」と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の参りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰そ」と問へば、「西行と申す者」といふ。文覺、手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年頃承り及びたるに、御尋悦びいり候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなる事の出で來んかと、

手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、日頃の仰に違ひたるはと怪しみ問ふ。文覺答へて、あら、いひ

四番 左持
雨中野草

春さめのふりそ
めしよりのべ見
ればふかみどり
にもなりにける
かな
右
しめじめといろ
ますあめのふり
そへばふかみど
りなるのべの草
かな

西行法師筆蹟（東京帝室博物館蔵）
ふらんそやまそたのあうもふあな
あつたのゆいほよ子あれもあつたのゆい
そわあつたのゆいほよ子あれもあつたのゆい

涅槃
梵語
悟道の究竟
地で生死を
脱した境界
轉じて死滅

がひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面様か、
文覺をこそ打たんずるものなれ。といへりとぞ。
西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを

雙林寺

京都東山圓山公
園の南にある天
台宗の寺

建久元年
後鳥羽天皇の御
世
(一五〇)

宗祇
連歌の宗匠
飯尾氏
常に諸國を行脚
した
紀伊國生
文龜二年(一一六〇)
歿
年八十二

思ひて詠じて曰く、

ねがはくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月
のころ

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建
久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集め
たるもの即ち山家集なり。
わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無
二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅かに
三人、西行・宗祇・芭蕉是なり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁
亂離の折をも厭はず西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉
は元祿泰平の機に乗じてまた西行・宗祇が行狀を慕ひしものと
す。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧

に正風の眼を開きし偉人、おのゝその道に一期を劃せし三家
がいづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅
行がいかにかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

そもく平安朝の貴紳・淑女は鴨・桂二川の流域數里の間を己が
世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足、畿外に出でず、一生の経過
極めて單調に、感情を刺衝するものなかりければ、従つて思想の
發展もあることなし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、
いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和
歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、只同じ詞花言葉
を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想、辭句の工にも、お
のづから典型を生じて、天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮
華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その内容は空しく、滔々

として風を成せる時、西行ひとり蹶起して從來踏襲せし典型を
簸却し、自ら山水の間に逍遙して直接に自然が隱微の聲を聞き、
感得するところは萬朶の花と咲けり。平安朝の末、崇徳院の御
製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠じ給へること
の、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふ
ところ一も古人の粉本を模倣せず、一字一句みな己が肺腑より
出づ。數百年の後なほ名聲赫々として天成の大才と許さるゝ
こと、また宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨て、直ちに自然の堂奥に入らんとす。
深く山川草木を愛してこれを視ること猶己を視るが如く、同情
の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見む老木は花もあはれなりいまいくたびか春に

あふべき

こゝにまた我が住みうくてうかれなば松はひとりにな
らむとすらむ

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり。妻子を
捨てたり。すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。

おのづから花なき年の春もあらば何につけてか日を送
らまし

うちつけにまた來む秋の今宵まで月ゆゑ惜しくなる命
かな

愛着は迷なり、この雲を去らざれば眞如の月は明かなり難しと
雖も山水もと無心にして人間の如き魔性を有せず、これを以て
窓前日夜の友とす、清澹虚無、一心もまた物によつて動かされざ

ること山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。來往自在、こ
こに疑懼の境も去つて安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらし安く待ちつゝ、今日もくら
さむ

雲にたゞ今宵の月をまかせてむ厭ふとてしもはれぬも
のゆゑ

西行の歌は企てゝ成すものにあらずして、自ら成れるなり。そ
のいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども月を友にてあかすこ
ろかな

今よりは昔がたりは心せむあやしきまでに袖しをれけ
り

要するに西行は生まれながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰已まざらしむるなり。

(國文學全史)

四 山家金槐集鈔

西行法師

鶯はわれをすもりにたのみてや谷のほかへはいでてゆくらむ

吉野山こぞゑの花を見し日より心は身にもそはずなり

にき

花もちり人の來ざらむをりはまた山のかひにて長閑なるべし

眞菅生ふる山田に水をまかすればうれしがほにもなく蛙かな

五月雨のはれぬ日數のふるまゝに沼の眞菰は水がくれにけり

山里のそとものをかの高き木にそゞろがましき秋の蟬かな

月ならでさし入るかげもなきまゝに暮るゝうれしき秋の山里

心なき身にもあはれはしられけり鳴たつ澤の秋のゆふ

ぐれ
つくぐれとものを思ふにうちそへてをりあはれなる鐘
のおとかな
迫門わたる棚無し小舟心せよあられみだるゝしまきよ
こぎる (山家集)

源 實 朝

今朝みれば山もかすみてひさかたの天の原より春は來
にけり (正月一日よめる)

ほとゝぎすきけどもあかず橋の花ちるさとのさみだれ
のころ
吹く風は涼しくもあるかおのづから山の禪なきて秋は
來にけり

ものゝふの矢なみつくろふこての上に霰たばしる那須
の篠原

筆蹟

世の中はをして
はなちのさうら
なくおもふやす
ぢよ神もたがふ
な
鶴がをかの神の
をしへしよるい
こそ家のゆみや
のまもりなりけ
れ
あづまのせき
もる神のたむけ
とて杉に矢たつ
るあしがらの山

世の中はつねにもがもな渚こご海士の小舟の綱手かな
しも
箱根路をわ
が越えくれ
ば伊豆の海
や沖の小島
に浪のよる
みゆ
わたつみの中に向ひていづる湯のいづのお山とうべも
いひけり (走湯山參詣の時)

その中にをくくくくくくくくくく
いよやすらよよよよよよよよよよ
鶴のさのれれれれれれれれれれ
家のいよよよよよよよよよよ
あつまのせきもる神のたむけとて杉に矢たつるあしがらの山
いよよよよよよよよよよ

(藏宮幡八岡鶴) 蹟 筆 朝 實 源

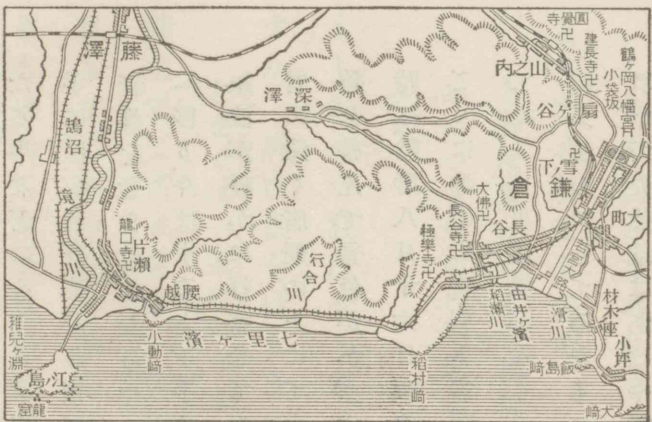
山はさけ海はあせなむ世なりともきみにふた心我があ
 らめやも (太上天皇御書下預時歌)
 大海の磯もとゞろによする波われて、くだけてさけてち
 るかも (あら磯に浪のよるを見てよめる)
 ものいはぬ四方のけだものすらだにも哀なるかなや親
 の子を思ふ (慈悲の心を) (金槐集)

五名残の星月夜

坪内逍遙

見渡す限り、前の方一面(平舞臺全部)は小壺の沖中の心。正面に見
 ゆる陸地(背景)は、小壺の沖中より遙かに由比が濱邊を見やりたる
 體にて、上手のずつと前寄には、磯馴れひよろ松を幾株となく戴き
 たる飯島が崎が間近く黒々と突出でてをり、其の奥、今の豆腐川あ

坪内逍遙
 英文學者で劇作
 家は雄藏
 早稻田大學名譽
 教授
 文學博士
 安政六年(一五九)
 美濃國加茂郡太
 田村尾張代官所
 生



たりの處には、おぼくの漁家が朧げに見え、篝火處々に燃え、そこに、

唐船の輪郭が——二本の帆柱には夥
 しく唐風の旗を翻し、無数の唐燈籠を
 吊したれど——距離遠ければ、黒々と
 見え、それより更に奥の方は、正面の中
 央へかけて、鎌倉材木座附近の港口の如
 體にて、數百艘の舟ども大津の浦の如
 附くに集ひ、又それよりも奥の方には、千
 近萬宇の宅軒を並べて、大淀のわたりに
 異ならざる様、其の家の燈火と月の光
 とにて、おぼろげながら見え、それより
 更に下手へかけては、人家は次第に疎
 らであるらしく見ゆれど、砂濱の廣々
 としたる體、夜目にもいちぢるしく、滑川、稻瀬川などの川口も、牙え

慈尊萬秋樂
雅樂の曲の名

實朝

將軍源實朝二十

六歳

實阿彌

和田朝盛入道

三十歳位

たる月光にて銀色に光つて見え、尙其の下手には稻村が崎が臥し
たる牛などのやうに突出で、其の奥には江の島も見え、それより下
手には、夜色蒼茫たる相模灘、風は悉く和ぎつくして、海面はまるで
青疊を敷き連ねたるやう。牙えに牙えたる月は、もう大分西の方
へ移り、今はずつと下手の空に照つてゐる。飯島が崎の岩々には、
銀波が静かに打寄せてゐるのが見える。引汐らしい静かな浪の
音に遠く唐船の上にて奏しつゞくる慈尊萬秋樂の限りもなく哀
愁を帯んで音色がかぶさつて聞える。
時は、陰曆八月十六日夜の九時ごろ。
こゝに沖中に、實朝と實阿彌と只二人きりを載せたる小艇が漂つ
てゐる。更に風がなく、浪が無いので、櫓をも櫂をも抛ちて、自然に
漂ふまゝにしてゐたものらしい。が其の小艇が、前記の景中に現
れいでた途端は、あはや實朝が舳先に立つて、海中に躍り入らんと
した刹那である。

實阿彌は駭きあわて、今しもうしろから抱きとめてゐる。

和こりや何となされまするぞ。あゝ、もし……御前！御前！

どうなされましたぞ。

と實阿彌は、尙も振拂はうとする實朝をやう／＼のことで抱きと
め、やつと船中に引据ゑて、なほうしろから抱きながら顔を覗き込
みて

もし、お心が狂はせられましたか。但しは御本性でござりま
すか。或は世をはかなませられての御生害か。

とまでは一氣に言つたが、忽ちこらへかねて、はら／＼と落涙し、

御尤でござります。御無理とは思ひませぬ。お言葉次第で、
私もすぐにお伴を致します。強ちお止め申すのではござ
りませぬ。只、お覺悟遊ばすに先だち、只一言、お別のお言葉を
ば下しおかれませ。もし！もし！

と泣きながらいふ。此の間、實朝は惘然として黙つてゐたが、此の時漸く我に復りたる體にて、しづかに實阿彌を制し、

實　もうよい、もうよい。……大事ない、大事ない。手を離せ。

とこれにて實阿彌は、尙不安さうな思入にて、抱いてゐた手を離し、泣きながらも油断せず、實朝の様子を見守つてゐる。實朝は十分冷靜の態度に戻つて、

あゝゆるしてくれ。我ながらおぞましい振舞をした。もう決して懸念には及ばん。

靜かに座を改め、取亂した姿を取繕ひなどして歎息しつゝ、

船に乗るまでも、乗つてからも、決してこんな氣はなかつたのぢやが、今がたの述懐で、われとわが述懐に感動して、はじめて心の醉を覺え、つい女々しうなつてゐた處へ、冴えわたるあの月の光！　あの靜かな、奥深い浪の色！　あゝ、月めがおれを

誘ひをつたのぢや。魂がふとあこがれ出ようとしたのぢや。

……さぞ驚いたであらう。堪忍してくれい。……

とこれにて實阿彌はやゝ安心の思入れ。されど尙愁然として頭を垂れてゐる。

これを思ふと、いつぞやあの狂女が、月の佳い晩となると、龍宮へ往くというて、ともすれば、波間へ入らうとするとやら聞いたが、成程無理もないはい。

とこれにて實阿彌は、感慨に堪へかねたる思入れにて、

和　御述懐の餘りとは申しながら、狂女によそへさせられての其のお言葉は、餘りに勿體なうござります。源家正嫡の將軍家、日本六十餘州の兵馬の頭領とはお名儀ばかり、御政道の大事となつては、何一つお心のまゝにはならず、若しまた強ひて

御母公様
平政子

たつた一つの
宋の陳和卿の言
により造られた
唐船に乗つて唐
土の醫王山に詣
でようといふ望

御意通りに遊ばさるれば、いつ何處から、どんな毒手が下るやも圖られぬお身の上であるのみか、御母公様への御孝心から、たつた一つの御今生のお望をさへも捨てさせられます。此の世をばあぢきなうもおぼしめします筈。しかしながら、狂女は愚痴無智の極み、何一つ辨へがなければこそ、自他をも顛倒し、前後をも忘れます。御前は聰明叡智にましまし、自他を知らせらるゝことが深いゆゑに、それゆゑ、お身をも捨て、世をも捨てようと遊ばされます。彼の女と御前とがどうして一つになりませうぞ。

と涙を呑みつゝいふ。

實 (しづかに冷かに) いや／＼、なまなかに智慧があつて自他を知るといふことこそ、人間が身の不幸ぢや。善きにつけ、惡し

蓮生
熊谷次郎直實出
家して蓮生坊と
いふ

きにつけ、其の裏や表が見えすいて、何事にも、身や心が打込まれぬ。おれなどは、今の世の不具者ぢや。父祖の志を繼ぐことも出来ねば、西行の跡も追はず、蓮生が眞似も出来ぬ。酒色に慰まうとすれば、風雅が否み、和歌・蹴鞠に忘れようと思つても、大望めが嘲りをる。血に酔ふことの出来ぬ胸には、不仁を敢へてする勇氣もなく、なまなかの分別が邪魔となつては、佛の道に入ること叶はぬ。せめても、まだ見ぬ大世界の大自然



濱ケ井田

然の中に身を置いてと、天下の周遊を思ひ立つたも、今思へばこれも亦一時の氣休め。大といふも、小といふも、つまりは人間の思ひなしぢや。かうして小舟にちこまつて濱近う見る月も、あの唐船を千萬里の波濤に浮かべて大海原で見る月も、本來の光には變りのあらう筈もない。もうとうに死んでゐるのぢやと悟つたなら、自ら殺さうとするにも及ばず、未練らしう、さもしらしう味はひ残した行樂を漁らうとするにも及ばぬ。今のおれのおぞましい振舞は、全くの出來心ぢや。もう決して二度とすることではないはい。

とちつた調子にていふ。此の以前より艇は、波のまに／＼ゆるやかに、漂うてゐる。此の間、實阿彌は始終頭を垂れ、折々涙を拭うてゐる。

一旦はお心を
大君の勅をかし
こみ父母に心は
わくとも人にい
はめやも
ひんがしの國に
わが居れば朝日
さすはこやの山
のかげとなり
き
山は裂け海はあ
せなむ世なりと
も君に二心わが
あらめやも
(金槐集太上天
皇御言下預時
歌)
仙洞御所
後白河法皇

和 (尙泣きながら) 御自身のお爲ではなく、天下萬民の爲を思し召されて、一旦はお心を寄せられましたなれど、其の仙洞御所とても、頼しからず、さなくも、御母公様との御血縁は、切つても切れず、後楯と遊ばさるゝ頼し人は、一人もないゆゑ、不世出の御器量も、御大望も、行はせられう便宜もなく、只一時の勿體もない置物、飾物となつて、空しう老朽ちさせられますかと思へば、無念至極にござります。せめても、親や兄どもが輕卒に事を誤らなんだらばと、思ひ出さぬ日とはござりませぬはい。

と泣く。實朝はいよく、落着きたる體にて、
實 はて、もう歎くには及ばぬ。只今の發作によつて、おれは却てこの胸が輕うなつた。もう死なうとも思はねば、生きてゐ

るのをつらいとも、死ぬるをおそろしいとも思はぬ。しかしながら、この不思議な心境に入つたも、畢竟はおのしといふ心の友があればこそぢや。生前にさへ、おのれの心を知る者はおのしの外にはないからは、死んだ後に、おれを正しう傳へてくれる者は、なほさらおのしの外にはあるまい。おのしとおれとは、といひかけてちよつと涙聲になつて、身は二つぢやが心は一つぢや。

といひつゝ、實阿彌の手を握りしめる。實阿彌は、何もえ言はず聲を放つて泣く。

この間、艇は、尙浪のまに／＼、漂うてゐる。

萬秋樂の哀音はなほつゞいてゐる。

長谷寺

鎌倉町長谷にある寺

長谷寺邊のらしい梵鐘の音が、陸の方から聞えて来る。

と下手より、二人が乗つてゐる小艇の前へ、一人の女の溺死體が流

れて来る。これは、例の狂女の死骸なのである。衣類は以前のまゝにて、仰向になり、笑ひ顔をしたまゝで、ゆるく靜かに漂うて来る。實朝は、この間、どこぞながめるともなく、海面を見てゐたが、忽ちこれに目をとゞめ、やかて口早に、

實 實阿彌！ 實阿彌！

と呼ぶ。泣伏してゐた實阿彌は、急ぎ涙を押拭ひながら、

和 はつ。

と顔をあげる。この時死骸は、すぐ舷の傍を上手へと流れる。

實 あれを見い。あれは、たしかにこの間の物狂ぢや。衣類に

見覚えがある。水死しをつたものと見ゆる。……止めい。

早う止めい。

とこれにて實阿彌は、急ぎ櫂を取つて船を進め、既に一間餘も流れ過ぎたる死骸に追ひつきて櫂にて之れをおさへ、忽ち舷へ引寄せ

る。

和 成程、仰の如く、あの狂女めにござります。衣類もあの時のまゝでござります。ともかくも引上げまして、水を吐かせませう。

と既に死骸に手をかけようとする。實朝止めて、

實 いや〜、待て〜。(じつと死骸を見て)とうに事切れたと見ゆるのに、あゝ、さも嬉しさうなこの笑顔。龍宮へ到り着いたとでも思うてゐるのか!? (と暫くながめてゐて)あゝ、迎も助りさうにもないはい。

和 ではござりまするが、このまゝに押流しますのも酷いやうに存ぜられます。

實 いや〜。我に返らせたなら酷いはい。……流してやれ、流

してやれ。

とこれにて實阿彌、權の手をゆるめる。死骸は波のまに〜土手へと流れつゝ、やがて見えなくなる。實朝立身にて、じつとその行方を見送る。實阿彌も宜しく思入れあつて、徐かに權を取直す。寂しく悲しき萬秋樂はなほつゞいてゐる。

月はます〜牙えわたつてゐる。

唐船の燈籠や篝火は、今は殆ど残り少に消えて、船の大きな、眞黒な輪郭が、更に物すぐく際だち、さながら一種の巨大な怪鳥か何かのやうに見えてゐる。(逍遙選集―名残の星月夜)

六 奥の細道

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅

月日は百代の過客
夫天地者萬物
之逆旅、光陰者
百代之過客。
(唐の李太白)

去年の秋
元祿元年(二話)
の九月木曾路の
旅から歸つた

江上の破屋
今の深川區西元
町一番地に芭蕉
庵があつた

白河の關
福島縣白河町の
東南八軒磐城國
西白河郡古關村
旗宿にあつた

道祖神
旅人を守り道の
安全を守る神
さへのかみ

杉風
芭蕉の門人
杉山藤左衛門
魚問屋
深川六間堀にい
けすを設けそこ
に別荘も持つて
ゐた

をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮れ、



芭蕉

春立てる霞の空に、白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心をくはせ、道祖神のまねきにあひて、取る物手につかず。股引のやぶれをつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸するより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、
草の戸も住みかはる世ぞ雛の家

面八句

懷紙の第一面に
八句をしるした
連句

谷中

上野の西に連なる
丘陵

千住

東京府南足立郡
千住町

奥州街道の第一
次の驛

吳天

去年九月到_ル東_ル

洛_ル今年九日來_ル

吳_ル郷。兩邊蓬髮

一時白、三_ナ廣_ク菊

花同色黄_ク。

(唐の白樂天)

草加

埼玉縣北足立郡
草加町

奥州街道の第二
次の驛

千住より八軒餘

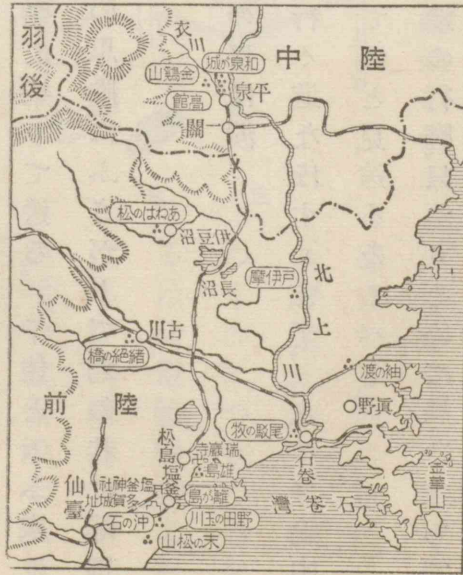
面八句を庵の柱に懸け置き、彌生も末の七日、曙の空おぼろくとして、月は有明にて、光をさまれるものから、不二の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢、またいつかはと心細し。むつまじきかぎり、は宵よりつどひて、船に乗りて送る。千住と云ふ處にて、船をあがれば、前途三千里の思胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそゞぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の初めとして、行く道なほすゝまず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへども、耳にふれて未だ目に見ぬさかひ、若し生きて歸らばと、定めなき頼みの末をかけ、其の日漸く草

加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれるもの先
 づ苦しむ。只身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、
 ゆかた・雨具・墨筆のたぐひ、あるはさがりがたき餓
 などしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の
 煩となれるこそわりなけれ。



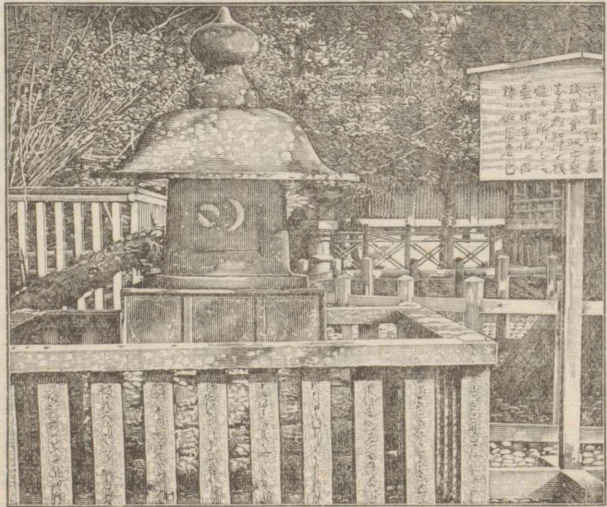
近附泉平及び島松

それより野田の玉川沖の石をたづぬ。末の松山は寺を造りて、
 末松山といふ。松の間々皆墓原にて、羽をかはし枝を連ぬる契
 の末も、終はかくの如きと、悲しさもまさりて、鹽竈の浦に入相の

野田の玉川
 宮城縣陸前國宮
 城郡多賀城村に
 ある小川
 鹽釜の南五百餘
 米
 日本六玉川の一
 沖の石
 多賀城村八幡の
 農家の池にある
 といふ
 末の松山
 多賀城村八幡に
 ある丘
 海岸へ四軒餘
 鹽竈
 同郡鹽釜町

籬が島
 鹽釜の海上二軒
 餘にある島
 つなで
 みちのくはいづ
 くはあれど鹽竈
 の浦こぐ舟のつ
 なでかなしも
 (古今集)

鐘を聞く。五月雨の空聊か霽れて、夕月夜幽かに、籬が島も程近
 し。蟹の小舟漕ぎつれて、魚さかな
 分つ聲々に、つなでかなしも
 とよみけん心も知られて、い
 とゞ哀なり。其の夜盲法師
 の琵琶をならして、奥淨瑠璃
 といふものを語る。平家に
 もあらず、舞にもあらず、ひな
 びたる調子うち上げて、枕近
 うかしがましけれど、さすが
 に邊土の遺風忘れざるもの
 から、殊勝に覚えらる。



籬が島の神宮

奥淨瑠璃
 仙臺淨瑠璃とも
 いふ
 平家琵琶
 舞
 幸若の舞

鹽竈の明神

昔奥州の一宮
今は國幣中社

國守再興

仙臺藩主陸奥守
伊達政宗慶長十
二年(三三六)修造

文治三年

後鳥羽天皇の御
世(八四七)

和泉三郎

名は忠衡
父秀衡の遺命を
守りて義經に仕
へ遂に兄泰衡に
殺された

雄島

瑞巖寺の西南陸
近くあり橋を
架けてある

扶桑

支那にて日本を
さしていふ名

洞庭

支那の湖南省の
北にある大湖

早朝鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽
きらびやかに、石の階九段に重なり、朝日あけの玉垣をかゝやか
す。かゝる道の果、塵土の境まで、神靈あらたまりますこそ、我
が國の風俗なれと、いと貴し。神前に古き寶燈あり。かねの扉
の面に、文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の俤、いま眼の
前にうかびて、そゞろに珍し。かれは勇義忠孝の士なり。佳名
今に至りて慕はずといふことなし。まことに人能く道を務め
義を守るべし、名もまたこれにしたがふと云へり。日すてに午
に近し。船をかりて松島に渡る。其の間二里餘り、雄島の磯に
着く。
抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西
湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝ

西湖

中華民國浙江省
杭州府の西にあ
る小湖

浙江

錢塘江
潮の干満大きく
さし潮の勢はす
さまじい

大山祇

山を掌る神
伊弉諾伊弉册二
神の子

雲居

瑞巖寺中興の僧
萬治二年(三三六)
寂
年七十八

ふ。島々の數を盡くして、敬つものは天を指さし、伏すものは波
に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重に疊みて、左にわかれ、右
につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松
の緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめて、屈曲おのづから撓め
たるが如し。其の氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶ
る神のむかし、大山祇のなせるわざにや。造化の天工、いづれの
人か筆を揮ひ詞を盡くさん。
雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の
跡、坐禪石などあり。はた松の樹陰に世を厭ふ人も稀々に見え
侍りて、落穂松笠などうちけぶりたる草の庵しづかに住みなし、
いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく、立寄るほどに
月海に映りて、晝のながめまたあらたむ。江上に歸りて宿を求

會良 芭蕉の門人
河合惣五郎
信州生江戶住
寶永七年(三三〇)
歿年六十五

素堂 山口信章
甲府の人
江戸に出て芭蕉
庵の近くに住む
享保元年(三三六)
歿年七十五

原安適 深川の醫者

濁子 芭蕉の門人
中川甚五兵衛
大垣の人

瑞巖寺 松島町にある
清和天皇天長五
年(八三)創立
もと天台宗で松
島寺といつた
眞壁の平四郎
法心和尚
常陸國眞壁郡の
人

見佛 鳥羽天皇頃の高
僧

雄島に住す
精進苦行十二年
あねはの松
宮城縣陸前國栗
原郡澤邊村姉齒
にあつた松

緒絶の橋 同縣同國志田郡
古川町にあつた
小橋

雉兎芻蕘 文王之困方七十
里、芻蕘者往、
雉兎者往焉。
(孟子)

黄金花咲く
すべろぎの御代
榮えむとあづま
なるみちのく山
に黄金花咲く
(萬葉集)

むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寝すること、あやし
きまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす 會良

予は口をとちて、眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時
素堂松島の詩あり。原安適松が浦島の和歌を贈らる。袋を解
いて今宵の友とす。且杉風濁子が發句あり。

十一日、瑞巖寺に詣づ。當時三十二世の昔、眞壁の平四郎出家し
て、入唐歸朝の後開山す。其の後に雲居禪師の徳化によりて、七
堂葺改まりて、金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれ
りける。かの見佛聖の寺はいづくにやと慕はる。

十二日、平泉と志し、あねはの松緒絶の橋など聞傳へて、人跡稀に
雉兎芻蕘の行きかふ道、そこともわかず、終に道踏違へて石巻と

寶永十三年(三三九)
雲居禪師中興
瑞巖寺と改む

見佛 鳥羽天皇頃の高
僧

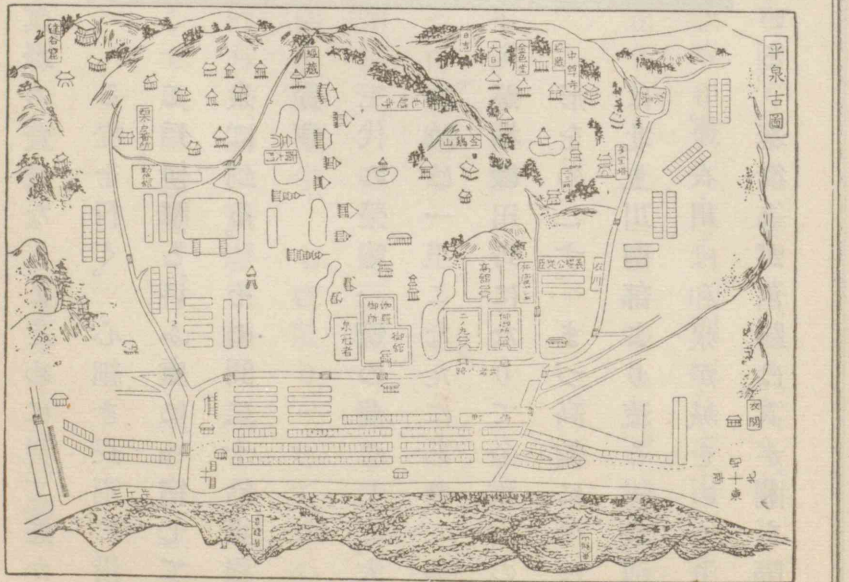
雄島に住す
精進苦行十二年
あねはの松
宮城縣陸前國栗
原郡澤邊村姉齒
にあつた松

緒絶の橋 同縣同國志田郡
古川町にあつた
小橋

雉兎芻蕘 文王之困方七十
里、芻蕘者往、
雉兎者往焉。
(孟子)

黄金花咲く
すべろぎの御代
榮えむとあづま
なるみちのく山
に黄金花咲く
(萬葉集)

いふ港に出づ。「黄金花
咲く」とよみて奉りたる
金華山海上に見渡し、數
百の廻船入江につどひ、
人家地を争ひて、籠の煙
立ちつゞきたり。「思ひ
がけずかゝる處にも來
れるかな」と宿からんと
すれど、更に宿かす人も
なし。やうく貧しき
小家に一夜を明かして、
明くれば又知らぬ道迷



平泉古圖 (志草沿館高州奥)

袖の渡 宮城縣陸前國桃生郡橋浦村にあるといふ
 尾駮の牧 石巻の近くか
 眞野の萱原 同縣同國牡鹿郡
 稻井村眞野 石巻の東
 長沼 同縣同國登米郡
 新田村新田沼
 戸伊摩 同郡登米町
 三代 藤原清衡・基衡・
 秀衡 文治五年(八四〇)
 秀衡の子泰衡が
 頼朝に滅された
 一炊の夢 盛生が邯鄲の宿
 屋で黄梁を炊く
 間に見た富貴の
 夢
 金雞山 秀衡の築いて平
 泉の鎮護とした
 高館の西
 高館 平泉驛の北凡そ
 一軒



ひゆく。袖の渡尾駮の牧眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間二十餘里程と光覺ゆ。

三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が墟は田野になりて金雞山のみ形をのこす。まづ高館にのぼれば北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて泰衡等が舊跡は衣が關を隔て高館の下にて大川におちいる。

南部 盛岡地方
 衣川 北上川に入る支流
 和泉が城 秀衡の三男和泉
 三郎忠衡の居城
 國破れて 國破山河在、城
 春草木深、感
 時花濺淚、恨
 別鳥驚心、烽
 火連三月、家書
 抵萬金、白頭搔
 更短、渾欲不
 勝簪。
 兼房 (唐の杜甫)
 義經の老臣增尾
 七郎
 年六十三で白髮
 をふり立て奮闘
 して義經に殉死
 した
 二堂 經堂と光堂
 三將 清衡・基衡・秀衡
 三尊 左勢至菩薩
 中尊阿彌陀如來
 右觀世音菩薩

て南部口をさしかたため、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うちしきて時の移るまで涙をおとしぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡
 卯の花に兼房見ゆる白髪かな
 曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風に破れ、黄金の柱、霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍ひて、藁を覆うて風雨を凌ぐ、暫く千歳の記念となれり。

さみだれの降りのこしてや光堂
 (芭蕉全集——奥の細道)

山崎宗鑑
連歌師
山崎に隱栖す
天文二十二年(三三三)年八十九
荒木田守武
連歌師
伊勢内宮神官
天文十八年(三三〇)年七十七
筆蹟
命毛のみじかき
ふでや土正
長頭丸
松永貞徳
連歌師
松永久秀の孫
京都に住む
花の本の號を賜はる
承應二年(三三三)年八十三
安原貞室
貞徳の門人
京都の紙商鍵屋
彦左衛門
延寶元年(三三三)年六十四
北村季吟
歌學者で連歌師
寶永二年(三三五)年八十八

七 初時雨

手をついて歌申し上ぐる蛙かな 山崎宗鑑
元朝や神代の事も思はるゝ 荒木田守武

命毛のみじかき
ふでや土正
長頭丸
松永貞徳
連歌師
松永久秀の孫
京都に住む
花の本の號を賜はる
承應二年(三三三)年八十三
安原貞室
貞徳の門人
京都の紙商鍵屋
彦左衛門
延寶元年(三三三)年六十四
北村季吟
歌學者で連歌師
寶永二年(三三五)年八十八

貞徳筆蹟

皆人の晝寢の種や秋の月 松永貞徳
松影や月は三五夜中納言 安原貞室
まぎくといますが如し魂祭 北村季吟
有明の油ぞ残るほとゝぎす 西山宗因
白露や無分別なる置きどころ

西山宗因
俳諧談林派の祖
肥後熊本藩士
江戸に住す
天和二年(三三三)年七十八

小初瀬や月を蝉鳴く相國寺
梅翁

宗因筆蹟

筆蹟
小初瀬や目がね
もよその夕霞
梅翁

行く水や竹に蟬鳴く相國寺 上島鬼貫
そよりともせいで秋立つ事かいの

筆蹟
初花や雲に根の
あるよし野山
おにつら

初花や雲に根の
あるよし野山
おにつら

おにつら

鬼貫筆蹟

草臥れて宿かる頃や藤の花 松尾芭蕉
五月雨や色紙へぎたる壁の跡
猪もともに吹かるゝ野分かな
初時雨猿も小蓑をほしげなり

榎本其角

芭蕉の高弟
江戸の人
寶永四年(三三六)
歿年五十六

筆蹟

夜も既に明けて
水雞の行衛哉
其角

夕立や家をめぐりて家鴨鳴く 榎本其角
鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春
夜も既に明けて
水雞の行衛哉
其角

蹟筆角其

服部嵐雪

芭蕉の高弟
淡路生江戸住
寶永四年(三三六)
歿年五十四

向井去來

芭蕉の高弟
肥前生京都住
寶永元年(三三三)
歿年六十二

ぬれ縁や薺こぼるゝ土ながら 服部嵐雪
黄菊白菊その外の名はなくもがな
動くとも見えて畑打つ男かな 向井去來
秋風や白木の弓に弦はらん

筆蹟

應々といへどた
たくや雪の門
去來

應々といへどた
たくや雪の門
去來

蹟筆來去

春花園凡兆

芭蕉の高弟
加賀金澤の人
歿年未詳

内藤丈草

芭蕉の高弟
尾張犬山侯の重
臣後世を捨て、
粟津に住す
寶永元年(三三三)
歿年四十二

森川許六

芭蕉の高弟
近江彦根藩士
正徳五年(三三五)
歿年六十三

小宮豊隆

文學者
東北帝國大學教
授
明治十七年福岡
縣生

猿蓑

芭蕉七部集の一
初時雨猿も小蓑
をほしげなりと
いふ句で名がっ
いた

初潮や鳴戸の波の飛脚船 春花園凡兆
しぐるゝや黒木つむ屋の窓明り
時鳥なくや湖水のさゝ濁り 内藤丈草
うづくまる薬の下の寒さかな
清水の上から出たり春の月 森川許六

八 芭蕉と去來

小宮豊隆

去來と凡兆とが猿蓑を撰んでゐる時のことである。其角から
此木戸や鎖のさゝれて冬の月
といふ句を書いて寄越して「冬の月がいゝか、それとも霜の月が
いゝか迷つてゐるといふ。みんな「冬の月がいゝ」といふ。芭蕉
がそれを聞いて「其角が冬霜に煩ふべき句にもあらず」といつて、

「冬の月に定めて、集中に加へさせる。
 「霜の月」と「冬の月」との、此の場合の優劣は、私にはどうもそれほど鮮かに映つて來ない。「霜の月」も「冬の月」も、これまで確に見て來てはゐる。しかし白狀すると、見て來てゐるといふやうな口幅つたい言葉は到底氣愧づかしくて使へないほど、私はその姿を心に刻みつけてゐないのである。唯臙げな印象を搔立て、熟考してみると、「霜の月」には或特別な色があるだけに、景色が限定される傾がある。さうして句の表にあるたくらみがほのかに浮かんで來るから、それだけに意圖が見えて、却て物凄さが弱められる。ところが、それが「冬の月」となると、景色が無限に廣くなるばかりでなく、冴えきつて取附きはもないうやうに冷い月の光の支配の下に、一切が氷死したやうにしんと靜まりかへる、その

筆蹟
 湖の水まさりけ
 り五月雨
 去來



向井去來筆蹟

一方を劃して、鎖のさゝれた城門が黒くぬうつと立つ事になるのである。かう描いて見ると、これは、どうしても「冬の月」でなくてはならない。「霜の月」であつてはならない。「霜の月」で、「冬霜に煩ふべき句にもあらず」と云つて、無造作に「冬の月」にきめてしまつた芭蕉の自然の姿に敏感な心は、全く羨ましい程である。芭蕉に限らず、當時の名ある俳人たちの、殊に自然現象に對する細緻な感受性は、敏感を誇る現代の詩人たちを遙かに

凌いで、寔に驚嘆に値する。
 ところが猿蓑が版になつてからあけて見ると、字と字との間が詰つて「此木戸」が「柴戸」としか讀めないやうになつてゐる。するとその時大津にゐた芭蕉から去來の所へ手紙が届いた。手紙には「柴の戸にあらず、此木戸なり。かゝる秀逸は一句も大切なり、たとひ出版におよぶとも急ぎ改むべし」とある。出来上つた本の中のこの句を一々書き改めろといふのである。若しくは版を毀してこの句の所を刷り直させろといふのである。前の無造作にも感心したが、この神経質には一層感心させられる。これは藝術に對する眞劍な愛情——藝術を神の如くに敬ひ、神の如くに愛するとても謂ひたいやうな——を持つてゐるものでなければ、なまやかな心持では、到底口にするこの出来

ない言葉である。或種の人には自分の藝術に對してなら、これに似た言葉を、今でも吐くことがあるかも知れない。これはしかし自分の愛する弟子ではあるが、他人の藝術である。他人の藝術の爲に主張するのだから、主張するものにとつては、何等の疚しさを感ずることなしに主張し得る筈ではあるけれども、それ

まづたのお椎の
木もあり夏木立
ばせを

よほふのむい椎の本
あつたを

芭蕉筆蹟

だけに美しいものに對する情熱が高まらなければ、外の人たちの迷惑を冒してまでも、押して主張し得ないことでなければならぬ。この言葉はやがてかの花屋日記の中にある「われ生涯いひすてし句々一句として辭世ならざるはなし。若しわが辭

花屋日記
芭蕉の臨終の模様を記した日記

筆蹟
まづたのお椎の
木もあり夏木立
ばせを

世は如何にと問ふ人あらば、この年頃いひすて置きし句いづれなりとも辭世なりと申したまはれかし。といふ言葉の眞實を裏書する。

野ざらし紀行

貞享元年(三十四)
芭蕉四十一歳の八月野晒を心に風のしむ身かなと詠んで江戸を出立ち故郷伊賀から近畿を遍歴して翌年四月江戸に歸つた紀行

芭蕉の野ざらし紀行の中に湖水眺望と前書して、
辛崎の松は花より臙にて

といふ句が掲げてある。この句は「にて」といふ破格な互爾波どめの故に、當時弟子たちを非常に驚かしたもののらしい。色々な人が色々なことを云つて、自分の前に、他門の前に、格式の前に、この句を辯護しようとしてゐる。

或人にて留りの難あらんや。といふ。其角答へて曰く「にては哉にかよふ故哉留めの發句にて留めの第三を嫌ふ。哉と

呂丸
芭蕉の門人
岡師氏

句選年考
芭蕉句選年考
石河積翠園著

尙白
江左氏
芭蕉の門人

いへば句切迫ればにてとは侍る。……呂丸曰く「にて留めの事は其角が解あり。又是は第三の句なり。いかに發句とはなしたまふや。去來曰く、是は即興偶感にて發句なること疑なし。第三は句案に渉る。もし句案に渉らば第三等に下らん。」とあるのを見ても、その一斑は想像し得ると思ふ。

句選年考によれば、尙白の如きは、自分の選んだ孤松集に、この句を「臙かな」として載せてさへもゐるのである。尤もこれは尙白が親切から翻譯したのではなくて、覚え違ひであつたかも知れない。しかし若しそれが覚え違ひであつたとしても、その事はこの句の互爾波留めの破格なことを證明する所以とはなつても、その反對を意味するものではない。尙白には、要するに留めの發句は發句として思料することが出来なかつたのであ

る。随つて尙白は、自分が思料することの出来る形に於て、この句を自分の頭の中に收めてゐたのである。このことを呂丸の言葉が裏側から明白に證明する。呂丸はこの句を發句ではな
いといつてゐる。第三の句だといつてゐる。それをどうして發句にしたものか不思議でならないといつてゐる。
事實これは破格な留め方であるに違ひない。て留めの發句は
それでも三つ四つはある。併しにて留めの發句は、あの芭蕉の
多い句の中で、私の知つてゐる限りでは、これ唯一つしかないの
である。随つて切字なくては發句の姿にあらず、附句の體なり
といふやうな言葉を、切字の意味を極めて狭いものに制限して
おいて、嚴格に遵奉しようといふ事になると、この發句に對して
非常な矛盾を感じるのは、極めて當然のことであらねばならな

い。才氣の潑刺たる其角と感受性の細緻な去來といへども、た
とひその才氣とその感受性とで、自分の眼の上にかゝる濁りを
拭ひ去ることが出来てゐるとはいへ、やはり外の人たちと同じ
やうに、この破格の前に、或不安を感じてゐるといふことが、その
口吻から想像されるやうな氣がするのも、無理もないことだと
考へられる。

しかも芭蕉はそれに對してかういつてゐるのである。「其角去
來が辯皆理窟なり。我はたゞ花より松の臚にて面白かりし
みなり」と。芭蕉からいへば、かなと切り、なりと留めるよりも、
てと残す方が、自分の心持に自然であり、直接だつたのである。
思ふに、この留めを「かな」とし、「なり」とする時は、この句は辛崎の松
だけを詠んだ句になつてしまふ。「にて」と残す時は、しかし辛崎

の松は一つの點景になる。廣い湖水の縹緲とした煙波の中の一つの點景になる。湖水眺望と置いた前書からいつても、この句は辛崎の松だけに跼踏すべきものではなくてもつと廣大なものを示唆するものでなければならぬ筈である。其角の議論に對して、唯眼前なるは」と芭蕉が答へたさうであるが、にては實に眼前のみならず、又眼前の視野を示唆するものである。自分の心持に自然な直接な表現の爲には、一切の慣例を踏みつけても構はないと考へてゐる所に、若しくは一切の慣例を踏みつけなくてはゐられない程に表現を迫る新しい強い内面衝迫を藏してゐる所に、人としての、藝術家としての、芭蕉の大きな一面がある。

酒堂
芭蕉の門人
濱田氏

岩鼻やこゝにもひとり月の客

といふ去來の句がある。酒堂が下五を「月の猿」にしろといつた。しかし去來はそれを承服しない。やつぱり「月の客がいゝ」と主張する。さうしてその事を芭蕉に話す。「猿とは何事ぞ」と芭蕉は酒堂を頭からどやしつけてしまふ。さうして去來に、「一體お前は、この句をどう思つて作つたのか」と訊く。去來答へて「明月に山野を吟歩し侍るに、岩頭又一人の騷客を見附けた」といふ。「先師曰く、こゝにもひとり月の客とおのれと名乗り出でたらんこそいくばくの風流ならぬ。たゞ自稱の句となすべし。この句は我も珍重して笈の小文に書入れける。去來はその解釋にあつと感服して引下つた。彼は「予が趣向は一等下り侍りけり。先師の意をもて見れば少し狂者の感もあるにや」とすぐその次

笈の小文
芳野紀行とは別
去來抄によると
芭蕉自撰の集で
あるが傳はらな
い由

につけ加へてゐるのである。俳句は詩形として短小を極めたものであるから、或場合には、其處に詠まれてゐる句境に對する作者の立場まで完全に表現することが出来ない。その意味に於て、俳句は表現の形式として、藝術として、甚だ不完全なものであるともいへる。しかも一方から言へば、俳諧道に精進するといふ事は、一面、その句境に對する作者の立場を的確に攫んで、その俳句を十分なる價值に於て賞翫し得るやうになるといふ事でもあるのだから、その道に深入りした人からいへば、この詩形は毫も不便を感じさせない詩形であるのかも知れない。事實、その句境に對する作者の立場を捉まへて、その俳句を十分に活かしきることは、俳諧道に於ける成道の賜物である。芭蕉が此處で、自稱として見ると、他稱

ディオニョス
Dionysus
ギリシヤの
神話にある
酒の神

として見るとによつて、同一の句が傳へる感動の強さに非常な變化があることを教へたのは、芭蕉が俳諧道に於けるこの成道の發露の一つに外ならぬ。これはまさしく卓見である。さうして特に此處では、他稱と自稱と立場を變へることによつて、芭蕉は、作者へも思ひも寄らなかつた別趣の猛烈な感動の世界を、同一の俳句の中から開展させて見せてゐるのである。さうしてこの新しい開展は、一面からいふと、芭蕉の心の中にディオニョスの要素が多分に動いてゐることを證明する。芭蕉の心の中にディオニョスの要素が多分に存在してゐるといふ事は、これを取上げるまでもなく、彼の俳句の多くのものが十分にその證據を提供する。しかし此處で興味があるのは、芭蕉の奔放な感興が去來の溫雅な感興と、著しい對照をなし

アポロン

ギリシヤ神話にあるオリンピアの神の一日の神音楽詩醫療の神

Apollo

て現れてゐる點にある。去來の作意に従へば、この句はかなり大宮人の句がある。芭蕉に従へば、これは月の美しさに惱亂された者の感極つた叫びのやうなものである。随つて、去來を去來らしく活かすためには、無論この句は、去來當初の作意のやうに他稱の句として眺むべきであるに違ひない。しかし、去來を離れて單獨にこの句の藝術的な價値を問題にすれば、これはどうしても、芭蕉の解釋のやうに自稱の句として味はふべきものである。

さうして、いはゞアポロンの去來の句を、その儘の形でディオニュゾスのものに攫んだ芭蕉は、その事によつて、一面明月に對して常にディオニュゾスの感興を働かしてゐた人であることを暗示するものである。しかも芭蕉は、自分の立場一つの

大西祝

哲學者
文學博士
早稻田大學教授
岡山生
明治三十二年歿
年三十六

アリストートル

Aristotle (前384—前322) 希臘の大哲學者

ソロモン

Solomon (前993—前953) 富と榮華と智慧とにすぐれたイスラエル王

箴言

舊約全書の中の一書

上だけを、馬車馬のやうに一直線に駈出して行く人ではなかつた。同時に外の立場が存在することをも認め、それらの立場と自分の立場とを比較し、商量する餘裕を持ち宏量を持つ人であつた。其の邊の消息は、彼が去來に、汝この句をいかに思ひて作せるや」と訊いてゐる事から、推定することが出来る。彼は既にこの問を發する前に、去來の立場からもこの句を吟味して見てゐるのである。(傳統藝術研究)

九 俚 諺 論

大 西 祝

世に聖賢と稱せられ、大詩人と呼ばるゝものゝ俚諺を好み用ひたるは其の例に乏しからず。アリストートルも希臘の俚諺を集めんとせる事ありき。ソロモンの箴言といふももとこれ往

Israel
イスラエル
古代猶太

古のイスラエル人民の俚諺を蒐めたるものにあらずや。何時の世よりともなく俗間に言傳へたる諺に深遠なる教訓を藏せるもの數ふるに遑あらず。これらは言ひふるせるによりて少しもその妙味を減殺せず、却て汲むに隨うて涌出づる泉の如く用ふるごとに其の味の清新なるを覺ゆ。誰が作りしともなく俗間に謠はるゝ俚諺のしばし、古今名家の作に比して遜色なきのみか別に特殊の妙趣を湛ふる所あるが如く、俚諺も亦人生の經驗に於ける智慧を傳ふるに亦一種特別の妙味あり。その卑俗なる故を以てその意味の深長なるを認めざるはこれ眞理は唯難澁なる文學にのみ藏せらるゝと誤認すればなり。俚諺の一特徴は世間に通用すといふことにして、其の言ひ傳へ易きを貴ぶが故に、其の言句多くは短し。此の故に諺の上乗な

Epigram
エピグラム
警句

るものは貨幣と同じく運ぶに易くして價の貴きものたるべし。羅馬の一詩人がエピグラムを蜜蜂に譬へて「螫あり蜜あり軀は小さし」と言へるは、凡ての俚諺にとは謂ふべからざれども、其の最も妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乗なるものは多くは此の三者を具へ、言短くして意義味はふべく、寸鐵人を刺す妙あり。人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺は自ら律語を爲す傾あり。我が國語にては五七又は七五が其の自らなる律呂なれば、我が國の俚諺には此の律に従へるもの甚だ多し。「雉子も鳴かずば撃たれまい」「心の鬼が身を責める」といふが如く、最も人口に膾炙せるものにして七五の調子をなせるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ」「おもふ念力岩でも通す」身を捨て、

身を捨て、
山川の末に流る
る様敷もみをする
て、こそうかむ
瀬もあれ(空也
上人繪詞傳)

こそ浮かむ瀬もあれ。などは七々の調子をなして語拍子よし。
右と同じき理由により同語又は同韻を重ねたる類のものも多
し。例へは「多勢に無勢」「短氣は損氣」「弱り目に祟り目」處かはれば
品かはる。「藥九層倍」「勝つて兜の緒をしめよ」といふが如し。
かく律を成し尾韻又は頭韻を合はすに於ては既に詩の句法に
似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具象的に
言做して感動の強からんことを求め、又これが爲にはしばしば
誇張の言を喜ぶなども、それが詩歌に似たる點なり。此の故に、
諺には物の分量をいふにも其の數又量を定めていふを好む。
「七たびさがして人を疑へ」「人の噂も七十五日」「預り物は半分の主」
「人に一癖なくて七癖」などの類は數ふるに違あらず。數の中に
ても最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。「三度目が定の

文殊
智慧を掌る菩薩

Paradox
パラドックス

急がばまはれ
武士のやばせの
舟は早くとも急
がばまはれ瀬田
の長橋(宗長)

目。三年たてば三つになる。懺悔話をすれば三年の罪が減びる。三
人よれば文殊の智慧。三人よれば人中。二度あることは三度ある。
「朝起は三文の得」石の上にも三年居ればあたゝまる。其の他多く
あるべし。「用心は臆病にせよ」黒犬にくはれて灰の和滓たれかすにおそ
れる。などは誇張していふによりて其の意味を成せるものゝ例
なるべし。
誇張を喜ぶと同じ理由を以て俚諺はパラドックス即ち一見ま
ことしやかならぬ言句を用ふるを喜ぶ。此の種の諺に深く味
はふべきもの少からず。「急がばまはれ」言はぬは言ふにまさる。
「逢ふは別れのはじめ」兄弟は他人のはじまり。論語讀の論語知ら
ず。人を使ふは使はれる。など其の例なるべし。かく相反するが
如き事柄の中に却て相通ずる所あるを發見するは深遠なる智

長者の萬燈
阿闍世王が釋迦
の爲に祇園精舎
に奉つた多くの
燈は消えたが貧
窮な老婆のやつ
との思で奉つた
一燈は消しても
消えなかつた話

慧の一特徴なり。
バラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相列
ぶるは吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を
喜ぶ。「骨折損のくたびれまうけ」聞いて極樂、見て地獄。「問ふは一
旦の恥、問はぬは一生の恥」長者の萬燈より貧女の一燈などは其
の例なり。

反對を置くのみならず總じて二種の事柄を相列べてそれを比照
するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の譬喩に富める所以に
して、其の譬喩の極めて妙なる、詩人の作としても恥づかしから
ぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは多く此の類にあり。
今思ひ出づるに従つて其の例を掲げんか。「馬には乗りて見よ、
人には添うて見よ」旅は道づれ、世は情」といふ如きは幾たび唱す

るも其の趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木、人は武士」これ我が
國民の以てそが理想を誇るに足るものゝ一なるべし。「佛法と
藁屋の雨は出でて聞け」風流の心に富める國民ならで誰か之れ
をえ言ひ出でん。これを口ずさめば、詩心、道心、宗教心の相結び
てなせる高雅幽玄なる妙趣の浮かみ來るを見るべし。

かく二つの事を列べ出でて相比照せるものよりも唯譬喩を掲
げて其の意味を匂はせたるものは其の數遙かに多かるべし。
「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」目糞鼻糞を嗤ふ」といふ如きは此の
例なり。又巧に隱喩を用ひたるもの多し。例へば「商賣は牛の
涎」得手に帆をあげる」といふが如し。かく譬喩の用ひやうは種
種あれど、其のこれを用ふるは寓言に於ける用ひ方とは同じか
らず。「目糞鼻糞を嗤ふ」といふ如きは多少寓言に近よれる所あ

るが如く思はるれど、俚諺と寓言とは後者は敘事の體裁を具へ、前者は然らざる點に於て全く相異なり。同じく意を寓して譬喩を用ふるも、寓言はこれを出來事又は動作として語り、俚諺は時間に結ばずして唯常恆の事實として語る。以上述べたる諸點は皆これ俚諺が其の意味を言ひ表はす仕方の詩句に似たる所あるをいへるなれど、唯其の形に於て詩に似たる所あるのみにはあらず、又其の想に於て詩趣を具ふるものの趣からぬは曩に擧げたる例を以ても認知し得べし。故に俚諺は其の形の上より見るのみならず、更に其の教ふる事柄に就いて研究せば其の興味は一層深かるべし。予輩は今委細に此の方面を論ずるを得ず、たゞ聊か研究の道を開かんために、こゝに想ひ當れる二三の點を述べんと欲す。

貞女は兩夫に見えず
王蠋曰、忠臣不
レ事二君、貞女
不レ見二夫、
(史記)

一國民の言ひなれたる俚諺の内容を深く研究すれば、其の國民の歴史、氣質、風俗、人情、學術、宗教、社會制度等、其の一切の生活と其の生活の理想とに就いて發見する所多々あるべし。此の點に於て諸國民の俚諺を比較するはいと興味あることなり。我が俚諺の中、今即座に想ひ出づるもの三四を擧げんに、上に引ける「花は櫻木、人は武士」といふ美しき諺は言ふも更なり、武士は食はねど高楊枝、武士は相見互」といふ如きは、我が國の歴史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又之によりて、かゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ」といふを見れば、千萬言の歴史的敘述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふ者の勢力の如何なりしかを察知し得べく、女に家なし、貞女は兩夫に見えず、

老いては子に従へ
未^マセフニニ
 嫁^セ從^フ父^ニ既^ニ
 嫁^{スレバ}從^レ夫^ニ死^{スレバ}
 從^ニ長^子ニ儀禮

三界
欲界
 色界
 無色界

といふなどは、我が國に固有なる諺といふべからざれども、亦以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、嫁が姑になる。老いては子に従へ。といへば、我が國の家族制度を示す所あり。「さはらぬ神に崇なし。棄てる神あれば助ける神あり。神は正直の頭にやどる。苦しい時の神頼み。などは、宗教思想を示すべく、袖ふり合ふも他生の縁。といへば、以て佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。

歐洲諸國の諺には夫婦の關係をいへるもの甚だ多く、我が國にては寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し。「親の心、子知らず。子を知るもの親に如くはなし。子ゆゑの闇に迷ふ。孝行をしたい時分に親はなし。かはいゝ子には旅をさせよ。子は三界の首枷。子が思ふよりは、親は百倍も思ふ。といふなど、親の慈をいふや至

れり、盡せり。その上に、子よりも孫はかはいゝ。といへる、何の言かこれにまさりて孫の愛の濃かなることを發表するものぞ。かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺はまた能く人情の他面をいふ。「子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪なし。とは、よくも吾人の主我心を言穿てるものかな。

一般の人情に自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而して其の中に如何によく普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「下さるものは夏も御小袖。かたきの家にても口をぬらせ。ころんでも唯は起きぬ。泣く子も目を見る。まことに然り、泣く子すら自身を護るには油斷せざるなり。「油斷大敵。小を棄て、大に就け。長いものには巻かれよ。曲らねば世に立たれず。など、何れか利益の念

を主とせざる。

俚諺は事の一面を見てこれを誇張して言ふ傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判断の相反するが如く思はるゝものあれど、かく両面よりいふところよく世態人情の實相にかなひて、其の判断概ね公平なり。「すきこそ物の上手なれ」といへど、「下手の横ずき」といふを忘れず、親に似ぬ子は鬼子」といへば、形は生めど心は生まぬ」といふ。かく事の両面を叩いて世相の内秘、人情の裏面を穿たんと力むる、是即ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を許きて、巧に罵倒し了するものあり。

同様なる意味の俚諺を集むるも亦一興ならんか。「猿も木から落つる」弘法も筆のあやまり、智者も千慮に一失あり、龍馬のつま

づき。「上手の手から水が漏る」などの類多くあり。同一の俚諺を言ひかへたるの多き、針の穴から天のぞく」といふに越えたるはなからん。「管の穴から天のぞく」竹の管から天のぞく。「鑰の穴から天のぞく」よしのずぬから天のぞく」など其の何れか一つが原始のものならん。

我が國の俚諺は、他國の俚諺に比して其の性質及び價值如何。これらの問題を考ふる前には、まづ我が國の俚諺を採集せざるべからず。予輩は早く、世人の適當なる準備を以て、此の事に手を着けんことを切望せざるを得ず。トレンチの言へる所に従へば、イスパニヤの俚諺の數は三萬あり、又獨逸の俚諺十萬を下らず、而して此等が彼の知れる諸國の俚諺の最も數多きものなりと。我が國の俚諺は其の數多しや、少しや、恐らくは知れる

トレンチ
Trench
(1807—
1886)
英國の
高僧の
詩學の
者人

人なかるべし。(大西博士全集—論文及歌集)

一〇 借家大將

井原西鶴

井原西鶴
元祿時代の小説
作者
元祿六年(一六五三)
歿
年五十二
室町
京都市烏丸通り
の西の通り
烏丸通り
今の京都驛の前
を北に通ずる通
家質
家屋を擔保とし
て金を貸すこと

室町菱屋長左衛門殿借家に居申され候藤市と申す人慥に千貫目御座候。「廣き世界にならびなき分限我なり」と自慢申せし。子細は二間口の棚借にて千貫目持、都の沙汰になりしに、烏丸通りに三十八貫目の家質を取りしが、利銀積りておのづから流れ、はじめて家持となり、これを悔みぬ。今までは借屋に居ての分限といはれしに、向後家あるからは京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。此の藤市利發にして、一代のうちにかく手前富貴になりぬ。第一、人間堅固なるが身を過ぐる本なり。此の男家業の外に反故

狀日
書狀の到着する
日

袖覆輪
袖口



井原西鶴

の帳をくゝり置きて見世をはなれず。一日筆を握り、兩替の手代通れば錢小判の相場を附け置き、米問屋の賣買を聞合はせ、生薬屋、呉服屋の若い者に長崎の様子を尋ね、線綿、鹽、酒は江戸棚の狀日を見合はせ、毎日萬事を記し置けば、紛れし事はこゝに尋ね、洛中の重寶になりける。不斷の身持、肌、單襦袢、大布子綿、三百目入れてひとつより外に着ることなし。袖覆輪といふこと、この人取りはじめて、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて、終に大道を走りありきし事なし。一生の内に絹物としては紬の花色一つは海

海松茶染

海松のやうな黒
みがかつた茶色
で染めかへしの
きかぬ色

鬼緞

麻糸で荒く織つ
た布

鳥邊山

京都の東山にあ
る火葬場

六波羅

鳥邊山から西の
低地

當藥

せんぶり
苦參

藥草の名

大佛

京都方廣寺の大
佛

松茶染にせしこと、若い時の無分別と、二十年もこれを悔しく思ひぬ。紋所を定めず、丸の内に三つ引又は一寸八分の巴をつけて、土用干にも疊の上に直には置かず、麻袴に鬼緞の肩衣、幾年か折目正しく取置かれける。

町並に出づる葬禮には、是非なく鳥邊山に送りて、人より後に歸りざまに、六波羅の野道にて丁稚もろとも當藥を引いて、これを陰干にして、腹藥なるぞと、只是通らず、躓く處で燧石を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持はよろづかやうに氣を附けずしてはあるべからず。

此の男、生まれついて吝きにあらず。萬事の取廻し人の鏡にもなりぬべき願、かほどの身代まで年とる宿に餅搗かず。忙しき時の人遣ひ、諸道具の取置もやかましきとて、これも利勘にて大

佛の前へ誂へ、一貫目につき何程と極めける。十二月二十八日

の曙、急ぎ荷なひつれ、藤屋見世に並べ、請取り給へ。といふ。餅は搗きたてのこのもしく春めきて見えける。旦那は聞かぬ顔して、十露盤置きしに、餅屋は時分柄に隙を惜み、幾度か斷りて、才覺らしき若い者、秤の目りんと請取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて、今の餅屋請取つたか。といへば、はや渡して歸りぬ。此の家に奉公する程にもなき者ぞ。ぬくもりのさめぬを請取りし事よ。と、又目を懸けしに、思の外に減のたつこと、手代我を折つて、喰ひもせぬ餅に口をあきける。

其の年明けて、夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生を目籠に入れて賣來るを、七十五日の齡、これ楽しみの一つは二文、二つは三文に直段を定め、何れか二つ取らぬ仁はなし。藤市は一つを

東寺

京都の南端九條
にある眞言宗の
本山

七十五日

初物を食へば七
十五日長いき

(諺)

柳 正月餅花をつける枝に用ひる
 栂 節分に用ひる
 樺葉 正月の飾に用ひる
 桃 三月三日雛の節供に用ひる
 花菖蒲 五月五日端午の節供に用ひる
 薏苡仁 八朔の贈答に用ひる

二文に買ひていへるは、今一文で、盛なる時は大きなるがあり」と。
 心を附くる程の事あしからず。
 屋敷の空地に柳・栂・葉・桃の木・花
 菖蒲・薏苡仁など取りまぜて植置
 きしは、一人ある娘が爲ぞかし。
 葭垣に自然と朝顔のはひかゝり
 しを、同じ眺にははかなきものと
 て刀豆たたまめに植ゑかへける。
 何より我が子を見る程面白きは
 なし。娘大人しくなりてやがて
 嫁入屏風を拵へとらせけるに、洛
 中盡を見たらば、見ぬ處を歩きたがるべし。源氏・伊勢物語は心



永代藏

多田の銀山
 兵庫縣攝津國川
 邊郡多田村にあ
 る古い鑛山
 伊丹の北八軒餘

丸鬘
 簡單に圓くわが
 ねた結ひ方
 この頃は老若
 に限らず用ひた

のいたづらになりぬべきものなりと多田の銀山出盛りし有様
 書かゝせける。此の心からはいろは歌を作りて誦ませ、女寺へ
 も遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず、京のかしこ娘となしぬ。
 親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず。節供の
 雛遊をやめ、盆に踊らず。毎日髪かしらも自ら梳きて丸鬘まるまげに結
 ひて身の取廻し人手にかゝらず。いづれ女の子は遊ばすまじ
 きものなり。
 折節は正月七日の夜、近所の男子を藤市方へ長者になるやうの
 指南を頼むとて遣はしける。座敷に燈輝かせ、娘を附けおき、露
 地の戸の鳴る時知らせと申し置きしに、此の娘しをらしく畏ま
 り、燈心を一筋にして物申ものまうの聲する時、元の如くにして勝手に入
 りける。三人の客座敷に着く時、臺所に播鉢はくちの音響き渡れば、客

七草
芥なづな五行は
こべら佛の座す
ず菜すじしろ

掛鯛
正月の門松に二
匹の鹽鯛を掛け
ておくこと

荒神
三寶荒神
龜の神

馬追三吉
丹波與作又は待
夜小室節といふ
淨瑠璃の一段

こゝは丹波の城
主由留木殿の子
しらべの姫が江
戸の高家入間殿
の養女として江
戸へいくのがい
やといふを道中
雙六で機嫌なほ
した馬追三吉と
親子の名のりが
したくて出来ぬ
乳母滋野井が苦
しい心を描いた

耳を悦ばせ、これを推して「皮鯨の吸物」といへば「いや／＼」始めて
なれば「雑煮なるべし」といふ。又一人はよく考へて「煮麵」と落着
きける。必ずいふ事にしてをかし。

藤市出でて三人に世渡の大事を物語して聞かせける。一人申
せしは「今日の七草といふいはれはいかなる事ぞ」と尋ねける。

「あれは神代の始末はじめ、増水といふことを知らせ給ふ。又一
人、掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは」と尋ぬ。「あれは朝夕
に肴を食はずに、これを見て食うた心せよと云ふ事なり」。又太

箸をとる由來を問ひける。「あれは穢れし時、白げて一膳にて一
年中ある様に、是も神代の二柱を表はすなり。よく／＼萬事に
氣を付け給へ。さて、宵から今まで各話し給へば、最早夜食の出

づべき所なり。出さぬが長者になる心なり。最前の挿鉢の音

近松門左衛門
天祿時代の大戯
曲家

本名は杉森信盛
巢林子と號す
享保九年(三三四)
歿

年七十二
五十三次
江戸から京へ東
海道五十三次

南無諸佛分身
骰子の目に今は
●から●●●●まで
をしますが此の
頃は此の六字を
書いた

打出の濱
近江國大津の湖
岸

矢橋
大津から矢橋へ
舟で湖水を渡す
瀬田長橋をとほ
ると遠まはり
姥が餅

近江國草津の宿
の名物

みなくち鱈
近江國水口宿の
名物

は大福帳の上紙に引く糊を搦らした」といはれし。(日本永代藏)

一一 馬追三吉

近松門左衛門

これ／＼御覽ぜ、打たしやんせ。これこそ五十三次を居ながら
歩むひざ、膝栗毛馬。はいしいだらうちう雙六。南無諸佛分身と
書いた六字を六角の骰子は櫻木、花の都をまんなかに思ひ／＼
のしるしを置いて、さらばこちから打出の濱。大津へ三里。こ
こで矢橋の舟賃が、出舟めせ／＼、旅人の乗りおくれじとどさく
さ津。御姫様よりまづ姥が餅。一口二口、みなくち鱈踊りこえ、
坂へ越すのも骰子次第。骰子をふれ／＼、ふるや鈴鹿を跡にさ
がれば負けまいとせきに關より龜山に、煙草火うちの石薬師。
おつと桑名の舟わたし。吉田・二川・白須賀ちよいと越えて、新居

坂

立神坂
 近江國土山より
 伊勢國坂下へ鈴
 鹿山脈をこす坂
 三重縣伊勢國鈴
 鹿郡關町
 鈴鹿關のあつた
 處
 龜山
 同郡龜山町
 石藥師
 同郡石藥師村
 吉田
 今の豊橋市
 二川
 愛知縣三河國渥
 美郡大川町二川
 豊橋の東南八軒
 白須賀
 靜岡縣遠江國濱
 名郡白須賀町
 新居
 同郡新居町
 もと關所があつ
 た
 舞坂
 新居舞坂の間四

今切、舟に召せく、蛤召せのはまぐりく、濱松まで舞坂三里な。のり掛川を飛びおりて、機嫌笑顔や、さあ日坂ぢやの蕨餅、腰なは何ぞ日本一の大井川。仕合よしの旅雙六里、七里八里もたゞ一足に、さきへくと咲きかゝりたる藤枝岡部瀬戸の染飯、うつの山邊の十團子、ところくの名物買うて、お錢かつくつく手鞠子にひいふうみいよ、府中江尻にさつとんく。とんと打つたる興津波、松原はるゝ膏藥買うて、月をすひ出せ清見寺。由井蒲原や吉原のはなの蒲焼、名物の鰻の膚沼津の宿。三島越ゆれば箱根へ三里。骰子目次第に關越ゆる、悪い目打てば手判を取りに元の京へ立歸る。合點か。おゝ吞込んだ。小田原外郎うら大磯平塚。藤澤のさはりもなしに雙六のさいさきもよし、門出よし、道中早めてとつかはと急ぐ程が谷神奈川越え、川崎を越え、品川越え、ま

料そこに今切がある
 明應七年(二二六)の地震に切れて湖水が海に通じた
 舞坂濱松間三軒
 日坂
 靜岡縣遠江國小笠郡日坂村
 掛川の東八軒佐夜中山の西の坂
 藤枝
 同縣駿河國志太郡藤枝町
 岡部
 同郡岡部町藤枝の北八軒
 瀬戸
 藤枝と岡部の間の宿
 この名物くちなし染の乾飯を瀬戸の染飯といふ
 うつの山邊
 靜岡縣駿河國安倍郡宇都山

づ先駈のお姫様、一番勝に勝つ色の花のお江戸に着き給ふ。一の裏は雙六のさいはひあり、喜あり、慰みありける道中とどつと興にぞ入り給ふ。
 お側の衆に囃されて、幼心の姫君、かう面白い吾妻とは今までおれは知らなんだ。さあく往かう、早往かう。「やあ御座らうとおつしやるか。そりや、めでたいはく。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ。」と立騒ぐ。お乳の人は勇みをなし、左様なら、一度大殿様、お袋様とお盃。是も馬子殿お蔭ぢや、出来かいたく。そちには禮いふ、褒美やる、其處に待ちやや。」とさゝめき渡り、奥に御供し入りにけり。
 馬方は遂に見ぬ金の間を、うそくと覗き廻れど、蓆のほか踏みもならはぬ備後表、えゝ此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。

十圍子はこの名物
興津由井蒲原
何れも同國庵原

吉原
同國富士郡吉原

外郎
小田原の名物
の薬

元の禮部員外郎
陳宗敬の傳へた

とつか

神奈川縣相模國
鎌倉郡戸塚町

程ヶ谷
今横濱市保土ヶ

谷區

大高
腰高と同じ
菓子を盛る腰の

高い器
けよもの
殊勝な者

大名の家よりもこつちのうちがけつこでござる。」と獨り言して居たりけり。
お乳の人は大高にお菓子様々ぶんかうに盛入れ、どれ〜三吉其處にか。まあ〜そちはけな者ぢや。道中雙六お目にかけて、それ故に姫君様お江戸へござろと御意なさる。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子、有難う戴きや。お錢三筋買ひたい物買やや。ことにそちは通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢はうといや。見れば見る程よい子ぢやに、馬方させる親の身は、よく〜であらう。」と、いと懇の詞の末、三吉つく〜聞きすまし、由留木殿の御内、お乳の人滋野井様とはお前か。そんならおれが母様と抱きつけば、あゝこは慮外な。おのれが母様とは。馬子の子は持たぬ。」ともぎはなせば武者ぶ

杳掛
京都府山城國乙訓郡大枝村杳掛
京都より丹波に通ずる老坂即ち大江山の東の宿馬子の縁でこの地を出した

石部
滋賀縣近江國甲賀郡石部町

りつき、引きのくれば、継りつき、何の無い事申しませう。わしが親はお前の昔の連合、此の御家中にて番頭伊達の與作。其の子は私。此方様の腹から出た與之介はわしぢやはいの。父様は殿様のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覚え。杳掛の姥が咄には、母様も離別とやらで殿様に御奉公、こなたを姥が養育し、父様に逢はせたらう思へども、甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、滋野井様と尋ねよ。」と懇に教へて、姥はおれが五つの年、ひさしう痰を煩うて、擧句に鳥羽の祭にいて、餅が喉につまつてつい死んでのけました。在所の衆が養ひて、やうやう馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公します。これ守袋を見さしやんせ。何のうそを申しませう。お前の子に紛れはない。外に望は何もない。父様を尋

ね出し、一日たりとも三人一所に居て下され。みごと杳も打ちまする。此の草鞋もわしが作つた。晝は馬を追うて、夜は杳打ち草鞋作り、父様母様養ひませう。父様と一つに居て下され。拜みまする母様と取付き、抱付き、泣き居たり。お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我が子の與之介、守袋も覚えあり、飛附いて懷に抱き入れたく氣はせけども、あつあ大事の御奉公、養ひ君のお名の疵、偽つて叱らうか。いや、かはいげに、さうも成るまい。まあちよつと抱きたい。あゝ、どうせうと、百千色の憂き涙、雙つの眼にはたもちかね、咽び沈んで居たりしが、いやいや我が子ながらもさかしい者、偽つて眞まこととせず、母を心のきたない者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと涙のごうて氣をしづめ、こゝへ來い、與之介。

と引寄せて兩手を取り、さても大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしう、なぜ尋常にも育たぬぞ。顔の道具、手足まで、母はかうは産み附けぬ。美しい黒髪を、このやうに剃り下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞとさめ、と泣きけるが、これものを合點しや。腹から産んだは産んだれども、今では子でも母でもない。あさましう成りさがつたを嫌うて云ふでは更々ない。こゝの譯をよう聞きやや。母はもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓。殿様の御慈悲にて夫婦になされ、與作殿は段々に奏者役、番頭、千三百石までお取立、追腹ほどの御恩の家。其の間にそなたを設け、上には姫様御誕生。御内證のよしみにて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然に、二番と下座に下らぬ人。情なや父様が江

戸詰に大事の所を仕損ひ、又切腹に極つた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ。時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母を其の儘残さう爲、父様の命助り、奉公構ひの御改易。其の時母も一緒にのけば、尤も夫婦の道は立つ。『お姫様の乳離れ、お苦しみをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれ。』と父様のことわりゆゑ、第一は男のため夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼うても、御勘氣の末、氣遣ひな。與作が子とばし言やんなや。さあ早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果な生まれ性、現在我が子に馬追させ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとて、これが何になる事と聲を忍びに泣くばかり。

蟻の穴
千丈之堤以蟻
蟻之穴潰
(韓非子)



近松門左衛門

子は生まれつき賢くて聞分けある程猶泣入り、悲しい話を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし。といへば、ちやつと口おさへ、あゝあゝ、勿體ない。其の乳兄弟言はぬこと。姫君様は關東へ養子嫁子にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體。三吉と云ふ馬追が乳兄弟にあるなどと、どう妨げにならう

やら。蟻の穴から堤も崩れる。軽い様で重い事。ひそく言
うて人も聞く。まづ早う出てくれ。と泣く。云へば、あゝ、母様
あんまり遠慮過ぎました。先づ言うて見て下され。まだ言ひ
居るか、聞分けない。夫の事、我が子の事、母に如才があるものか。
合點の悪い、聞分けないと制するうちに奥よりも、お乳の人ほど
ここにぞ。御前から召します。と呼ばれば、あれ聞きや。人が來
る。出てたも。と手を取つて引きいだす。
不便や三吉しく、涙、頬冠して目を隠し、杳見まつべて腰に附
け、見すぼらしげな後影、こりや、ま一度こちらむきや。山川で怪
我しやんな。雨風雪ふり、夜道には、腹が痛い、と作病おこし、二日
も三日も休んで、煩はぬ様にしてたも。毒な物食はずに、腹や癩
疹の用心しや。可愛のなりや、いたくしや。千三百石の代取

が何の罰ぞ咎めぞ。と、式臺の段箱に身を投伏して歎きしが、懐中
の有合ひ一步十三袂紗に包み、これ、たしなみに持つて居や。と涙
ながらに渡さる。三吉見返り恨めしげに、母でも子でもない
ならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。其の一步もいらぬ。
馬方こそすれ、伊達の與作が總領ぢや。母様でもない他人に金
貫はう筈がない。え、胴慾な母様、覺えて居さつしやれ。とわつ
と泣出す其の有様。母は魂消え入りて、養ひ君、お家の御恩思は
ずば、さて一人子を手放して、なんのやらうぞ。奉公の身のあさ
ましや。と、悶え焦れて歎きける。

時に奥口ざゝめいて、早御立ちと姫君の御輿、昇きあげ行列立て、
お乳の人の乗物を平附けにこそ、昇き寄せけれ。お乳はさあら
ぬ顔附して、姫君の御伽に最前の馬方を此の乗物に引附、お慰

坂は
小室節又は小諸
節といふ小唄

佐々醒雪

國文學者
東京高等師範學
校教授

文學博士

京都生

大正六年歿

年四十六

浮世草子

元祿ごろに行は
れた當時の社會
の有様を寫した

小説

談林

口合滑稽などを
主とした俳句

西山宗因始める

みに謠はしや。「畏まつた」と宰領どもこりや、其處な自然生め、謠
ひ居らう。とぎごつなく、やあ此奴はほえをるか。何ぢやこりや
忌々し。」と握拳を二つ三つ戴きながら泣聲に、坂は照るく、鈴鹿
は曇る、土山あひの、あひの土山雨がふる。ふる雨よりも親子の
涙、中にしぐるゝ雨やどり。(近松傑作全集—丹波興作)

一一 西鶴と近松

佐々醒雪

井原西鶴は大阪の町人であつたと思はれる。若年から宗因の
門に入つて俳諧を學んだが、当初はこれを以て門戸を張るとい
ふ考もなかつたらう。恐らくは藝が身を助くる不仕合と察せ
られる。師翁宗因の歿したその年の冬に、始めて浮世草子を著
して西鶴は談林の點者から新生涯に入つた。

西鶴の草子は二十餘種。何れも簡短な小話を集めたもので、人
間よりは事件或は社會の風俗を巨細に描くといふ方面に力を
盡くして居る。そして後年の永代藏以下の者に至つては、西鶴
の思想が更に變化して稍、老成人の態度がある。勿論かの濶達

筆蹟

入相のひじき
松の風淋しさも
今ぞかし
ちるや櫻爰らに
茶屋があつた物
西鶴



井原西鶴筆蹟

な風は失つてないが、なほ貨殖の道を説いたり、大晦日に狼狽す
る様を嘲つたり、二日酔の頭痛を笑つたりする所は、流石に五十
近い老翁の酸いも甘いも知りぬいた異見といふ風が見える。
その文章に至つては何人も企及し難い長所を有つて居る。そ

の簡潔で奇警なことは前後に比類がない。若し國文學史上に強ひて類似を求めらば、唯清少納言の枕草子がやゝ似てゐるであらうか。それすら西鶴ほどに警句に富んではゐない。これは勿論西鶴その人の天稟の才でもあるが、又俳諧から得た教養に負ふ所が多いので、西鶴の文は一種の俳文であると思つて差支がないと思ふ。

元來談林俳諧は警句を尙ぶものである。その警句を一分間に五句位づつ連發したものがかの大矢數であつた。彼の文章に警句の多いことは、この教養の結果であらう。加之俳諧といふ小詩形の中に或思想を收めようとする爲には、自ら簡潔な敘法にも習熟すべきである。かくして學び來つた文章であるから、彼の文章には罅隙が多い。句と句との間に文法上の連鎖の不

大矢數
延寶八年(三三〇)
の夏西鶴が一日
に四千句を作つ
たもの

十分な所が頗る多い。これは全く俳諧の續け方より來たものであらう。要するにその文體も内容と共に俳諧に負ふ所ありとはいへ、かゝる創始の大手腕を示したことは極めて驚嘆すべきことである。

近松門左衛門、實名は杉森信盛といつて武門の出である。その生國については異説が多いが、長州萩の藩士で、同國深川にうまれ、幼時を肥前唐津に送り、二十歳前後で京都に出たともいはれてゐる。又京都生まれといふ説も強ちに否定する事も出来ない。三十四歳の時、始めて竹本義太夫の爲に新淨瑠璃を作つてから、その作曲は百餘種に上り、近松の名は都會に喧傳された。初期の作は皆時代物で、四十八歳の時始めて世話物を作つた。近松は時代物の方に多く苦心したもので、世話物は場當りの舊

竹本義太夫
義太夫節の元祖
攝津天王寺村生
正徳四年(一七三〇)
歿
年六十四

筆蹟

近松門左衛門、
姓者杉森、字者
信盛、平安堂集
林子之像
享保九年中冬上
旬
入寂、名阿壽院
穆矣日一具足居
士、不俟終焉
期、豫自記春秋
七十二歳。

作が多かつた。が今日の眼から見れば世話物の方が遙かに價値が多い。

近松の作に注意すべきことは、形式からいへば、その文體が漸く

散文を離

れて律語

的に進ん

だこと、

その様式

が敘事の脈を離れて漸く戯曲的體裁に變じたことである。更

にその内容に就いて見れば、新淨瑠璃は在來の荒唐無稽なもの

よりは幾分か事實らしい脚色になつて、人間らしい人間が描き

出されてゐる。これが近松の淨瑠璃の最も著しい長所である。

近松門左衛門 信盛平安堂集林子之像

享保九年 中冬上旬

入寂名阿壽院穆矣日一具足居士

不俟終焉期豫自記春秋七十二歳

近松門左衛門筆蹟

但しそれは比較的に自然であるといふことであつて、決して全く不自然な脚色がなくなつたといふのではない。ことにその時代物と世話物との間には、その點に關して非常な懸隔がある。時代物に於ては、近松の作にでもやはり至善の人物と極悪人が闘つてゐて、幾多の紛争の後に善人の勝利に歸するのである。その善人の甚だしく苦しめられる時には、往々不自然な超人間の勢力が出現して善人を救ふ。それでも見物が忠臣孝子の苦惱を見るに忍びないで、なし得べくば、自ら舞臺に躍り出でて、これを救ひたいといふほどにならせておいて、而して後神怪不思議な事件を點出して之を救ふのであるから、幼稚な見物はほとと息を吐いて安心する。その自然と不自然とを思ふに違がないといふのが近松の大いに歡迎された所以であらう。

世話物には當代の世相がさながら現れてゐる。蓋し近松は、當時の幼稚な見物人は古の英雄豪傑などといふものは恰も鬼神の如きものと想像してゐるといふことを知つて、超人間的の人物を時代物に描き出したが、世話物中に出づべき人物、即ち見物人が日常交渉してゐる張三李四の輩には、極悪人も至善人も皆境遇によつて支配される憐むべき人物であるといふことを見物もよく認識してゐるから、近松も亦常に執着や過失の多い憐むべきか弱い人間としてこれを描き出した。そこで世話物には人間らしい人物が多いのである。世話物の主人公は、抑へ難い感情に驅られて知らず識らず社會の常軌の外に逸出する、そこで社會の人と戦はねばならぬ。こゝに所謂世間の義理と人情との葛藤が起るのである。

近松の文章は實に巧緻なものである。その綿密な縁語や言懸け語の連続は必ずしも驚嘆すべきではなからうが、その道行の文句に敘景と抒情との巧に綯交ぜられてゐる所は確かに天下の逸品である。殊に最も感ずべきは事件の發展に伴なふ文段の推移に巧な事て、主要な人物が登場すると共に、簡単な會話や地の文で、これより以前の頗る複雑な事件の大體が説明される。それより以後は、事件の發展と共に人々の關係や境遇が明白になつて來て、見物人の爲に殊更に説明したやうな所が少しもない。その妙所は一々擧げることにも出來ぬが、殆ど神工といふべきであらう。(近世國文學史)

岡倉覺三
美術鑑賞家
東京美術學校長
江戸生
大正二年卒
年五十二

一三 狩野芳崖

岡倉覺三

五欲
眼耳鼻舌身より
おこる欲
大士
観音菩薩

一幅の濃淡、人天相分る。上は則ち無量光明の淨界なり、下は則ち五欲昏迷の穢土なり。大士の容顏端嚴にして、愁に和して微笑を含み、左手に楊柳を撚し、右手に寶瓶ほうびんを傾け、瀉ぎ來る無明空中一滴慈悲の水は清魂の人間に歸るを送るものなり。赤子の合掌して仰いで菩薩を見るものは、無知清淨にして餘念を懷かず。亂山突兀、暮雲暗澹、煙冷かに風荒る。憐むべし、呱呱たる阿孺何處にか墜下し去りて、憂悲煩惱の長夜に迷ひ、那邊の淨池に向つて如意心蓮を發き、再び慈悲の海に遡るを得ん。嗚呼、是芳崖狩野翁が畢生の傑作観音大士の像なり。翁嘗て人に語つて曰く、人生の慈悲は母の子を愛するに若くはなし。観音は理想的の母なり、萬物を發生煦育する大慈悲の精神なり、創造化育の本因なり。余此の意象を描かんと欲する、こ

ミケランジェロ
Michaelangelo
(1475—1564)
文藝復興
期の伊太
利の大藝
術家

こに年あり。未だ適當なる形相を得ず。と。此の圖は翁が最終の揮毫に係り、長逝に先だつこと僅かに四日、畫き了へて、未だ款を署するに至らざりしものなり。蓋し翁平生の心事此の一幅畫中に留存するものあらん。其の筆墨の沈著醇厚にして、其の賦色の明麗渾融なるは近世多く比類を見ず。特に意匠の高尙秀絶なるに至りては、技、道に進むものにして、遙かに古人を凌駕せんとす。尋常一様、墨を玩び筆を弄し、花天月地に風流三昧を事とするものと時を同じうして語るべからず。彼のミケランジェロの畫きたる創造クリエイションの圖は歐洲美術の神品と稱すべく、氣力豪邁にして布置雄大、唯見る雲間の上帝隻手を伸して大地を指し、倏忽一箇の壯士を現出するを。彼は則ち上帝の命令念力を以て人を創造するなり。是は則ち観音の慈悲法

力を以て人を發育擁護するなり。佛家發生の深理は自ら基督教造物の主旨と異なる所あり、其の美術上の形相も亦隨つて同じからず。人若し畫中の心情を看破し去らば、豈妙悟の天外より



狩野 此の超凡の絶技を抱きたる人は、未だ天下に名を成す能はず
野 して空しく黄泉の客となれり。
芳 然れども翁の妙想は竟にミケ
崖 ランジエロをして美を擅にせ

しめざりしなり。

翁姓は狩野、文政十一年正月十三日、長州に生まる。幼名幸太郎。父を晴阜と曰ふ。家世、萩藩の畫師たり。父、性剛毅にして俠氣

木挽町
江戸木挽町
狩野四家の一
狩野
狩野古法眼元信
以來徳川幕府畫
所預となる
室町幕府以來の
畫師

あり。自ら信ずること頗る固く、其の子を訓ふること甚だ嚴正なり。翁が勇邁果敢の氣力は多く嚴君の鍛錬による。母、溫柔貞淑、其の愛育慈養は翁の常に追念したる所にして、後年觀音の畫ある所以も亦此に基づく所あるべし。翁の豪懷英氣、風雲を叱咤する筆を以て、時として情致纏綿、曉露の海棠に墜つるが如き一種幽婉の變體あらしめたるも亦故ありと謂ふべし。

年十九にして始めて江戸に來り、木挽町狩野畫所に入る。爾來十有餘年、螢雪の功を積み、狩野門流の正格を練磨し、非凡の精妙を顯し、當時秘訣と稱したる師門の口傳の如きも、暗合默會して先輩を驚かし、巍然として畫所屈指の名手たり。安政六年江戸城本丸焼失す。再建に當り、大廣間天井の裝飾は翁選ばれて之を託せらる。然れども翁の心は未だ大いに安んぜざるものあ

周文 室町時代の畫僧
京都の相國寺に
居た
玉澗 支那南宋の畫僧
若芬の號
夏明遠 支那南宋の畫家
仇英 支那明代の畫家
雪舟 支那明代の畫家
馬遠 室町時代の畫僧
夏珪 支那南宋の畫家
南宋の畫家
相阿彌 室町時代の畫家
雪村 室町末期の畫僧

り、一朝自ら悟る所ありて、遂に別天地を開かんとするに至れり。當時狩野の畫風漸く衰微に瀕し、粉本摸寫の弊最も盛にして、周文の遠山に玉澗の雁陣を横たへ、夏明遠の樓閣に仇英の人物を坐せしめ、以て自家の製作となす者あり。當時の一幅の丹青を解剖し去らば、雪舟の樹木巖石、馬遠の蘆荻流水、夏珪の牧牛、相阿彌の歸帆を點々排列するに過ぎず。畫家の新案に係るものは纔かに雲煙と落款とのみ。翁の洞然大觀して自ら破格を企てたるは洵に已むを得ざりしなり。一日童子あり、戲に虎を描く。眼は是兩々の丸子、耳は是雙々の遠山、足は是四竿の老竹、斑文五六點、鬚毛兩三絲、添ふるに長大の尾を以てす。翁觀て大いに喜び、起舞して歎じて曰く、是なる哉、是なる哉。雪舟の骨、雪村の氣亦之に外ならず。畫の要は一意直到、唯心裏の影を以て紙上の

橋本雅邦 畫家
東京美術學校教
授
明治四十一年卒
年七十四

形となすに在り。意盡くる所は則ち筆の盡くる所なり。氣力満盈の間、豈一點の間筆を着くべけんや」と。是よりして筆墨を童子に與へ、白紙を以て其の畫く所に換へ、之を祕笈に藏し、夜靜かに人定まる後、孤燈を剪つて之を展覽し、畫中の上乘禪に悟入する所あり。此の時に於て翁の心事を解し、共に破格を期したるは、獨り橋本雅邦氏なりき。氏は翁と同日畫所に入る、時に年十三歳なりと云ふ。此の兩畫伯、一は雄拔奇豪、一は渾厚着實、共に表裏提挈し、新畫の端緒を開きたるは亦奇緣といふべし。心機漸く熟して、形相未だ成らず。新に生面を開きたる者の通弊として、忽ちにして奇僻に陥り、怪詭百出、滿幅の風雲魍魎、魍魎を奔らせて同門の嘲を招き、師家の罵に遭ひぬ。されど、翁自ら信ずる所あり、敢へて一步を退かざりき。憾むらくは世を舉つ

て俗陋、翁を知る者甚だ稀なり。慘澹辛苦嘗めざるなく、其の死に先だつこと兩三年、始めて其の心機と形相と相調和するを得て、畫法の自在を成したるものゝ如し。觀音其の他の傑作に至りては畫格遠く古大家に入り、人をして驚絶せしむるに足ると雖も、其の巧妙は既成の形相に非ずして、寧ろ含蓄にあり、未敷蓮華の香を含み、秋雲の雷電を藏するが如し。惜しいかな、未だ大いに其の圓熟縱横の妙を揮ふに及ばずして逝く、年六十一。時に明治二十一年十一月五日なり。翁人となり、内、忠實溫順にして、外、高邁俊逸なり。其の父母に至孝なるは郷閭の知る所にして、勝川門下に遊學したる時の如きは一身節儉を守り、潤筆を得ても之を私せず、郷里に送り、以て父母旦夕の料に供したりと云ふ。技藝の上に在りては虚心坦懷、

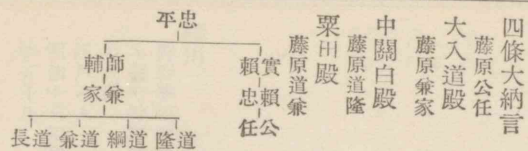
勝川
狩野勝川院雅信
木挽町狩野畫所
の八世
江戸の人
明治十三年歿
年五十八

好んで人に問ひ、門下子弟の説と雖も、苟も取るべきあれば、喜び拜して之を容れ、其の圖様を改むること屢なり。其の自ら信じたる所を説くに至つては、貴賤親疎の別なく、長談雄辯して必ず意を盡くさざれば已まず。翁又謠曲を愛し舞を好む。常に舞法の畫法と同一なる所以を説き、得意の事得意の人に遇へば、娑婆として起舞し、旁に人なきが若し。蓋し畫伯眼中唯畫あるのみ。顧ふに美術の大家たるものは自ら一家の美學を有するものなり。或は心に感じて口に之を言ふ能はざるものあり。或は默契して言ふを好まざるものあり。翁の如きは之を言ふを喜びたるものなり。翁は畫理を以て天地萬物の眞理を發明せんと試み、佛家禪僧の妙悟、漢儒西哲の深旨、總べて丹青鏡裏に照映して其の意義を判し、得失を論じ、仁義道德の大道、坐臥進退の

庸行に至るまで、悉く取りて以て畫訣とせり。翁常に言ふ、人生各自獨立の宗教なかるべからず。美術家の宗教は美術宗あり。復何ぞ之を他に求めんや」と。亦以て其の造詣を見るに足るべし。(天心全集—國華)

一四 藤原道長

四條大納言のかく何事にも勝れてめでたくおはしますを、大入道殿「いかでかゝらむ。羨ましくもあるかな。我が子どもの影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ」と申させ給ひければ、中關白殿・栗田殿などはげにさもや思すらむと恥づかしげなる御氣色にて物も宣はぬに、この入道殿はいと若うおはします身に「影をば踏まで、面をや踏まぬ」とこそ仰せられけれ。誠にこ



入道
藤原道長
豐樂院
大内裏の朝堂院
の西にある
仁壽殿
内裏の清涼殿の
東にある

そさおはしますめれ。内大臣殿をだに、近く見奉り給はぬよ。」さるべき人はとうより御心だましひの猛く、御まもりもこはきなめりとおぼえ侍るは。花山院の御時に五月下つやみに、五月雨も過ぎて、いとおどろくしくかきみだれ雨のふる夜、帝さうさうしくや思し召しけむ、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましたけるに、人々御物語申しなどし給ひて、昔恐しかりける事どもなどに申しなり給へるに、今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだにけしきおぼゆ。まして物離れたる處などいかならむ。さあらむ處に一人いなむや」と仰せられけるに、えまからじとのみ申し給ひけるを、入道殿は「いづくなりともまかりなむ」と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、「いと興ある事なり。さらばいけ、道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の

塗籠 周圍を壁で塗つた納戸の類
大極殿 朝堂院の正殿で大禮を行ふ處

吉上 衛府の下役で常詰のもの
瀧口 禁中の警衛などに任ずる武士
昭慶門 大内裏の八省院の北の外門



(實故賢前) 長道原藤

塗籠、道長は大極殿へいけ。と仰せられければ、よその君たちは便なき事をも奏してけるかなとおもふ。又承らせ給へる殿ばらは、御けしきかはりて、やくなしとおぼしたるに、入道殿はつゆさる御氣色もなく、私の従者をば具しさぶらはじ。この陣の吉上まれ瀧口まれ、一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には一人入り侍らむ。と申し給へば、證なき事。と仰せらるゝに、げにとて御手箱におかせ給へる小刀申して立ち給ひぬ。今二所もにがむゝ、各おはさふじぬ。

子四つ 午前二時に近いころ
奏して 内聲が時を奏して
丑 午前二時ごろ
右衛門の陣 大内裏の外郭西面の宜秋門の内承明門
内裏の紫宸殿の南の正門
宴の松原 宜秋門の外で豊樂院の後に當る所

「子四つ」と奏して、かく仰せられ議するほどに、丑にもなりにけむ。「道隆は右衛門の陣より出でよ、道長は承明門より出でよ」と、それをさへ分たせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、宴の松原のほどに、その物ともなき聲どもの聞ゆるに、ずちなくて歸り給ふ。栗田殿は露臺の外までわななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌の程に、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、物もおぼえて、身のさぶらは、こそおほせ言も承らめ。とて、各立歸りまゐり給へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかゞと思し召すほどにぞいとさりげなく、事にもあらずげにて、まゐらせ給へる。「いかに」と問はせ給へば、いとのどかに、御刀に削られたるものを、取具して奉らせ給ふに、こは何ぞ」と

高御座
大極殿の正面の
玉座

仰せらるれば、たゞにて歸り参りて侍らんは證さぶらふまじき
によりて、高御座の南面の柱のもとを削りてさぶらふなり。とつ
れなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。こと殿たちの
御氣色は、いまにもなほ直らで、この殿のかくて参り給へるを、帝
より始め、感じの、しられ給へど、羨ましきにや、又いかなるにか、
物も言はでぞ侍ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、
早朝藏人して削り屑をつがはして見よと仰言ありければ、もて
いきておしつけて見給ひけるに、つゆ違はざりけり。その削り
あとはいとけざやかにて侍るめり。末の世にも見る人は、なほ
あさましき事にぞ申し、かし。(天鏡)

一五 法成寺の造營

御堂

法成寺
後一條天皇寛仁
三年(一〇三三)道長
創建
址は鴨河の右岸
今の京都御所の
東隣

攝政殿

藤原頼通
道長の子

殿

藤原道長

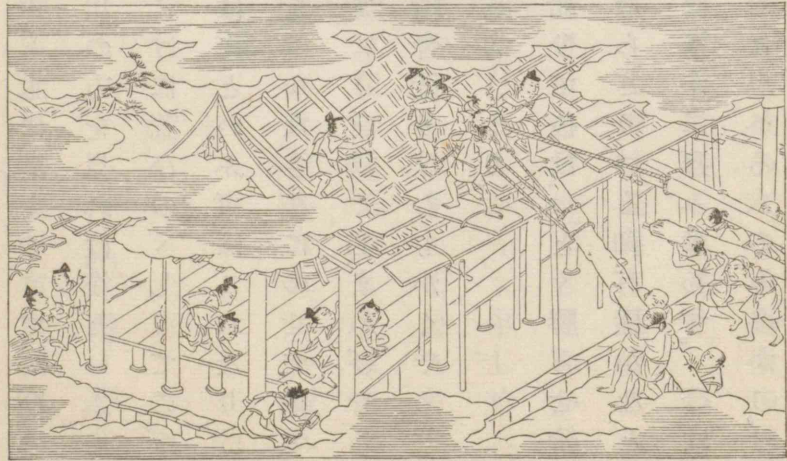
馬道
板敷の通路
渡殿
渡り廊下の類

今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事おぼし
急がせ給ふ。攝政殿國々までさるべき公事をばさるものにて、
まづこの御堂のことを先につかうまつるべき仰言のたまふ。
殿の御前も、この度生きたるは別事ならず、我が願のかなふべき
なめり。と宣はせて他事なくたゞ御堂におはします。方四町を
こめて大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ
給へば、夜の明るるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しうおぼさ
れて、夜もすがらは、山をたゞむべきやう、池を掘るべきさま、木を
栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々さまざま作りつゞけ、御佛
はなべてのさまにやはおはします。丈六の金色の佛を、數も知
らず作りなめ、そなたをば、北南と馬道をあけて道をと、のへ作
らせ給ひて、廊渡殿かず多く作らせ給ふに、雞の鳴くも久しくお

御封 親王以下諸臣に賜ふ民戸
 御莊 莊園
 莊園 寺社又は權勢ある人々の私有地
 地子 公田を借りて耕したるものゝ納める租

ぼされ、宵曉の御行も怠らず、安きいも大とのごもらず、たゞこの御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。日々に多くの人々参りまかで立ちこむ。さるべき殿ばらを始め奉りて、宮々の御封御莊どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきにおぼしたち、國の守ども、地子官物はおそなはれども、たゞ今はこの御堂の夫役材木、檜皮瓦など多く参らすることを、我もく々と競ひつかまつる。大方近きも遠きも参りこみて品々方々、あたりくつかまつる。或處を見れば御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかりなみゐて仕らまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼり居て、大きな木ど

もには太き綱をつけて、聲を合はせてえさまさと引上げさわぐ。御堂の中を見れば佛の御座作り輝かす。板敷を見れば木賊、椋の葉などして、四五十人手ごとに並み居て磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども數を盡くしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりの石をこゝろにまかせて切りと、のふるもあり。池を掘るとて、四五百人おりたち、山をたゞむとて、五六百人のぼりたち、また大路の



法成寺の造營

大津 滋賀縣郡大津市
 琵琶湖の津
 梅津 京都の西郊葛野郡梅津村
 桂川の津
 須達長者 釋迦の時の富商で慈善家
 Suddatta 給孤獨
 祇園 祇陀樹給孤獨園の略
 印度の舍衛國の太子祇陀と須達多と力を合はせて作つて釋迦に献じた精舎

方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに、綱をつけて叫びの、しり引きもてのぼるあり。賀茂川の方を見れば、筏といふものに、樽材木を入れて棹さして心地よげに謠ひの、しりてのぼるめり。大津梅津の心地するも、西は東といふ事はこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れど沈まず。すべていろくさまく言盡くし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舎造りけむもかくやありけむと見ゆるを冬の室、夏の風各ことくなり。かゝる御勢にそへて入道せさせ給ひて後は、いと勝らせ給へりと見えさせ給ふにも猶なべてならざりける御有様かなと近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜み參らす。今はこの御堂のあたりの本草ともならむと思へる人のみ多かり。そ

長谷寺 奈良縣磯城郡初瀬町長谷寺
 有名な觀音堂がある

天王寺 今の大阪市天王寺區にある四天王寺

高山樗牛 評論家
 名は林次郎 文學博士
 山形縣鶴岡生 明治三十五年歿 年三十二

なたざまに赴けば、海の浪もやはらかに立ちて、この御堂の佛をもて運ばせ、河も水澄みて、快く浮かべもて參ると見ゆ。猶なべてこの世の事とは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寝たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲にうまれ給へるなり。とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖德太子の御日記には、王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ。とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。(榮華物語)

一六 世界の四聖 高山樗牛

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人に

釋迦 Sākya 伽毘羅國
 Kapilavastu 恆河の支流
 畔にあつた
 中印度の王
 悉達多
 Siddhārtha
 跋提河
 Ajitavati

非ずんば誰かこれを能くせんや。釋迦孔子ソクラテス基督の
 四人世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。
 釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。
 父は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多といふ。釋迦は伽
 毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道せる後の尊號なり。
 釋迦身は一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に
 潜め、二十九の歳、妻子を捨て、王城を逃れ、山林に隠れて道を修
 むること六年、終に人生の奧義を極め、無上の正覺に徹底せり。
 爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十
 餘歳にして跋提河の邊に寂しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の
 教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。
 されど、徒に思索の高遠を欽びて人生の疑問に適切ならず、偏に

木鐸
 金口木舌、施ス
 政教一時所擬以
 警民衆者也。
 (論語註)
 魯國
 今の山東省泰山
 のあるあたり



(筆子道吳) 迦 釋

幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。
 其の流派を樹て、相争ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世
 の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間
 に生まれ、其の廣大なる
 慈悲と無邊なる智慧と
 を以て一世の木鐸とな
 り、民をして其の歸依す
 る所を知らしめたり。
 孔子名は丘、孔子は其の
 尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生まる。
 幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、
 旁ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に

至り、擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外其の風采を相望す。齊侯魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方に遊説を試みぬ。



(筆子道吳) 子 孔

のあり、子にして其の親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨

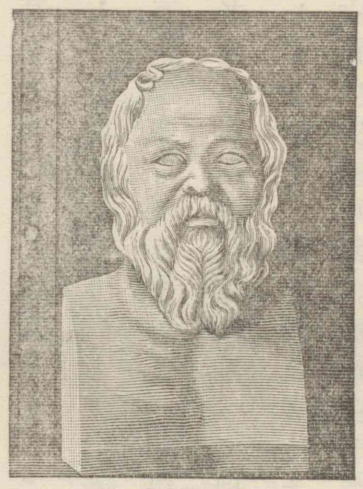
當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にして其の君を弑するも

吾が道
及西狩見麟
曰吾道窮矣
喟然歎曰莫知
我夫。子貢曰
何爲莫知子
子曰不怨天
不尤人。下學
而上達。知我者
其天乎。……
君子病沒世而
名不稱焉。吾
道不行矣。吾
何以自見於後
世哉。(史記)
ソクラテス
Socrates

然として故國を出て、大義名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に翻さんとす。その志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年。時非にして道容れられず、世復耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、嗚呼吾が道遂に窮せり。世遂に吾を知るものなきかと。門弟子貢慰めて曰く、何ぞ夫子を知る者なからんや。孔子答へて曰く、天を怨みず、人を尤めず。下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は没して名の稱せられざるを病ふ。吾が道行はれずんば、吾、何を以てか後世に見えんやと。幾ばくもなくして歿しぬ。時に年七十三。ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なりき。其の生まれしは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と

Sophists 詭辯學派

年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出てたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留り、道德は



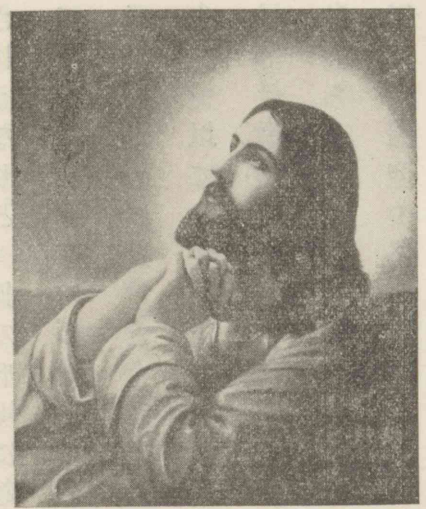
ソクラテス

空文の上のみ貴ばれたり。其の狀猶釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず、侃諤の正議、其の稀代の雄辯と相俟つて一世を風靡せり。然るに喬木

は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。其の訴狀に曰く、ソクラテスは國教を信ぜずして異教を勸め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべしと。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふる所、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く「命のみ」と。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて生死、靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては輒ち答へて曰く、予は唯正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にとありと知らずや」と。終に従容として毒を仰い

アスクレピオス 希臘神話で
 醫藥の神
 アポロの子
 基督
 Christ
 耶蘇
 Jesus
 ベツレヘム
 エルサレム
 の西南五哩
 半のところ
 Bethlehem
 ヨセフ
 Joseph
 マリヤ
 Maria
 ヨハネ
 Johannes

て歿しぬ。將に歿せんとするや弟子遺言を求む。ソクラテス
 曰く、爾、一雞を以てアスクレピオスの神に捧げよ。と。蓋し曾て
 病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖
 人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。
 基督は本名を耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ義
 にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベツレヘムに生まる。
 西曆紀元元年は實は其の生後四年に當るといふ。父はヨセフ
 と呼べる賤しき木匠にて、母の名をマリヤといふ。長じて三十
 歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、
 爾來三年の間猶太の各地を歴游し、諸の迫害に屈せずして其の
 福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華其の極に達し、禍亂の萌
 芽其の中に胚胎し、災異荐に至りて天下寧日なし。殊に基督の



基督

故國たる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被り、
 民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は
 詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心
 は齊しく偉人の現出してこ
 の暗黒の社會を照破せんこ
 とを渴望せり。基督この間
 に生まれ、自ら救世の使命を
 負へる神の子と稱し、昂然と
 して其の偉大なる新教理を
 宣傳せしかば、遠近靡然とし
 てこれに赴く。僧侶學者官吏等これを憚ばず、猥に新法異説を
 唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處

エルサレム
パレスチナ
の舊都
Jerusalem

す。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、神よ、彼らを許せ。彼らは其の爲すべき所を知らざればなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、エルサレムの女子よ、わが爲に哭くなかれ。唯己と己が子とのために哭け」と。かくの如くして、基督は三十三年の短き生涯を以て十字架上の露と消え去りぬ。基督死して後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是なり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。而して四聖の中、釋迦を除きてはいづれも、轆軻不遇の間に、其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。

ソクラテスと基督とはいづれも、讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れども、是等の人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは、毫も其の顧慮する所にあらず。故に、其の死に就くや、晏如として、恰も歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却てわが道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と蹉嘆せり。釋迦は衆生のために、其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、正義を信ずるものに取りて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、其の一日即ち國民の迷を覺さざるべからず」と。基督は己を罪に陥るゝものゝために、神に祈りたり。嗚呼、何ぞ其の慈悲の廣大にして無邊な

涅槃

Nirvāṇa
梵語、寂滅滅度な
どと譯す

身を修め

古之欲明明德
於天下者先治
其國、欲治其
國者先齊其
家、欲齊其家
者先修其身、
欲修其身者先
正其心、欲正
其心者先誠其
意、(大學)
孝は百行の本
孝百行之本、衆
善之始也。
(後漢書)

るや。

四聖は其の生まれたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違なきを得ず。今其の要略を擧ぐれば左の如し。釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを旨とす。それ、人生は苦に始りて苦に終る。生老病死何れか苦に非ざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。故に吾人は「我」の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。これ、人生究竟の樂地にして、即ち涅槃なり。孔子の教は身を修め家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆之に本づく。人は生まれ

ながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて之を全うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて身既に修らば家自ら齊ふべく、家齊は、國自ら治るべく、國治らば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始りて治國平天下に終る者と見るを得べし。ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。謂へらく、真正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて行はざると行うて知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして不朽不滅なるものなり。故に吾人の正義を行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず、道德は富貴の

山上の垂訓
基督が猶太の祝
福の山で求道者
に教訓を垂れた
もの（新約全書
馬太傳）

ために存せず、然れども富貴は道德の中に在り」と。
基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳
道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。曰く、心の
貧しき者は福なるかな。天國は其の人の有なればなり。悲し
む者は福なるかな。其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴
く如く義を慕ふ者は福なるかな。其の人は飽くことを得べけ
ればなり。憐む者は福なるかな。其の人は憐を得べければな
り。心の清き者は福なるかな。其の人は神を見るべければな
り。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬を
もめぐらしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて汝の敵を愛
せよ。人に見せんがために義を其の前に行ふなかれ。右の手
に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。偽善者の行に倣ふな

かれ。隠れたるを鑿み給ふ神はあらはに報い給ふべければな
り。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するな
かれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見
ざる。汝等求めよ。然らば興へられん。尋ねよ。然らば遇は
ん。叩け。然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門
は濶く、其の路は大きく、これに入る者は多し。嗚呼、いかに、生命
に至る門は窄く、其の路は細く、これを得る者の少きぞや。凡そ
この訓を聞きて行ふ者は磐の上に家建てたる智者の如く、聞け
ども行はざる者は砂上に屋を架せる愚人の如し」と。基督教の
精髓は後世の人如何なる色彩を加ふとも、實にこの山上の垂訓
に基す。

嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜々と

クリトン

古代ギリシヤのアテネ人で

約前四〇〇年頃の

ソクラテスの老

友

本篇はプラトン

對話篇の一なる

クリトンを久保

勉氏が譯して阿

部次郎氏が修整

したもの

ソクラテスが死

の宣告を受けて

後獄中へ訪ねて

來た老友クリト

ンとの間に交換

した對話

して生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆はこの教に頼りて道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なること、何を以てか是に比せんや。(釋牛全集)

一七 クリトン

久保 勉

ソクラテス クリトン、どうして君は今時分にやつて來たのだ。

それとも、もう餘り夙くないのか。

クリトン まだ随分夙いよ。

ソク 凡そ何時時分だらう。

クリ やつと夜明だ。

ソク 不思議だね、牢屋の番人がどうして君の言ふことを聴く

氣になつたのだらう。

クリ ソクラテス、あの男はもうよく僕を知つてゐるのだ、僕が度々やつて來るものだから。それにあの男は又僕から何かと心附を貰つてゐる。

ソク 君は今來たばかりなのか、それとも、もう大分前から來て居たのか。

クリ かなり前から。

ソク そんならなぜ君はすぐ僕を起しもしないで、黙つて側に坐つてゐたのだ。

クリ ソクラテス、ゼウスにかけてそんなことが出来るものか、實は僕自身だつて、こんなに不眠と悲歎とに惱まされてゐたくないと思つてゐるのだから。それどころか、僕はさつきから、君

ゼウス

Zeus

ギリシヤ神話に於ける最強最勝の神
オリンピヤ山の諸神の王

があんなに心持よく熟睡してゐるのを見て驚いてゐるところだ、さうして君に出来るだけ快い時を過ごさせるためにわざと起さなかつたのだ。僕はこれまでもよく君の一生を通じて君の性分を幸福だと思つて来たが、今度の不運に當つて、君が樂々と平靜にそれをこらへてゐるのを見ると、一層その感を深くする。

ソクだがね、クリトン、この年齢になつてゐながら、愈、最期が迫つたときにもがくのも不問な話だからなあ。

クリソクラテス、君位の老年でかういふ不運に陥る者は他にもあるが、併し彼等の年齢も、彼等がその身に降懸つた運命に對してもがくことは、阻みきれない。

ソクそれはその通りだ。が一體、君はどうしてこんなに夙く

やつて来たのだ。

クリソクラテス、僕は悲しむべき報知を持つて来たのだ。尤も今見受けるところ君のためには云へないが、併しそれは僕と君の友人の全體のために悲しむべく痛ましいものだ。特に僕にとつては、一番痛ましいと思はれるものなのだ。

ソクと云ふのはどんなことなのだ。それが歸着すれば僕が死なねばならぬことになつてゐるあの船が、デロスから歸つて来たとしても云ふのかい。

クリソクラテス、それが歸つて来たと言ふのではない。しかし今日中にもかへつて来るだらうとおもはれるのだ、船をスニオンで降りて其處からやつて来た二三人たちの話によると。だからこの報告から見ると、それはきつと今日はひるだらう。ソクラ

デロス

Delos
ギリシヤの
イージアン
海にある小
島

古代には浮島
でアポロは
こゝで生まれ
たといふ
アテネ人は
毎年聖船をデ
ロスに送つて
アポロ神に
供物をする例
でその船の歸
るまでは死刑
の執行を停止
された

スニオン

Sunion
アテネの南
にある

テス、さうすると明日は餘儀なくも君の一生の最期となるわけだ。

ソクでも結構ぢやあないか、クリトン。それが神々の御旨なら、その通りになるがいゝ。だが僕は、今日はそれがはひるまいと思ふよ。

クリ どうして君はさう推測する。

ソク それを君に話さう。僕は船が着いた翌日死ぬことになつてゐるのだらう。

クリ とにかくさう云つてゐるね、この事を掌る役人たちは。

ソク それぢやあ船がはひるのは、今日でなく明日だらうと思ふ。これは今夜つひさつき見た夢から推測するのだ。君が僕を起さなかつたのが當りともいふのだらうね。

フテイヤ

怒れるアヒ
レウスがギ
リシヤ軍を
去つて故郷
テッサヤの
フテイヤに
歸らうとす
るときアガ
メンソンの
使者にいつ
た話

Phthia

クリ それは一體どんな夢だつたの。

ソク 美しくて姿のいゝ、白衣を着た女が僕の側に來て、言葉をかけて、かう云つたやうに思はれたのだ——「ソクラテスよ、後三日、お前は幸饒きフテイヤに着くであらう。」

クリ ソクラテス、それは何といふ不思議な夢だ。

ソク その意味は明瞭だと僕は思ふがね、クリトン。

クリ 極めて明瞭だと云ふべきだらう。だが神に憑かれたソクラテスよ、今でも構はないから僕の言ふことを聽いて逃出してくれ。なぜと云ふに、君が死ぬと、僕には一つの不幸がやつて來るばかりではない、僕はもう二度と見出すことの出來ぬ親友を失ふ外に又君や僕をろくに知らぬ連中から、たゞ金を使ふ氣さへ僕にあれば君を救ひ出すことが出來た筈なのに、僕がそれ

を怠つたやうに思はれるだらう。だが友人よりも金銭を貴ぶと思はれる以上更に、不名譽なことが何處にあらうか。僕たちが一所懸命になつても君がこゝを立退かうとしなかつたのだなどといつたところで、多數者はそれを本當にしはすまいからね。

ソク併し、愛するクリトンよ、なぜ我々はそんな多數者の評判を気にしなければならぬのだらう。もつと顧慮に價する識者たちは、實際あつた通りのことがあつたのだと信ずるだらうぢやないか。

クリダが、ソクラテス、多數者の意見も顧慮しなければならぬことは、君にもわかつてゐるだらう。今度の事でも明かなやうに、誰でも彼等の誹謗を受ける者には、彼等はたゞ微小な禍害

ばかりではなく、恐らく最大の禍悪をさへ加へることが出来るのだもの。

ソククリトン、僕は寧ろ多數者が最大の禍害を加へ得る者であつてくれ、ばい、と思ふ。さうすれば彼等は又最大の福利をも加へ得るわけだからね。それなら結構な話だらうよ。併し彼等はどちらも出来ないのだ。彼等には賢者を拵へる力も愚人を拵へる力もない。彼等の拵へるものは偶然のまにまにだ。

クリ 或はさうかも知れない。だが、ソクラテス、僕に言つてくれたまへ、君はまさか僕やその他君の友人の身の上を心配してゐるわけぢやあるまいね、君が此處から逃出したら、僕たちは君の逃走を幫助した者として密告者に苦しめられ、さうしてその

結果、僕たちはその全財産若しくは巨額の罰金を徴収されるか、或は其の上猶他の罰をも受けなければならぬだらうなどと。若し君がそんな事を心配してゐるのなら、それは無用にしてくれ。君を救ふためには、これ位の事はおろか、必要とあらばこれ以上の危険をも冒すことは、僕たちの當然なすべきことなのだから。どうぞ僕の言ふことを聽いて、違つた途をとつてくれるな。

ソククリトン、僕はそれも氣にしてゐるし、まだ他にも色々ある。

クリ決してその心配には及ばないよ、君を救ひ出して此處から連れて行かうと言ふ連中の要求する報酬はいくらでもないのでだから。それから、密告者といふ者はどんなに安賣だか、従つ

テバイ	シミアス	ケベス
アテネの西	ピタゴラス	派の哲學者
北にある町	ソクラテス	の友人
	ケベス	ピタゴラス
	シミアス	派の哲學者
	ソクラテス	の友人
	ケベス	派の哲學者
	ソクラテス	の友人

て彼等を満足させるためには大した金もいらぬ。と云ふことを君は知らないのか。ところが僕の財産は君のためにはどう使つてもいゝのだ、あれで十分だらうと僕は思ふよ。若し又君が僕のために心配して、僕の財産を使つてはならないと思ふなら、此處に来てゐる異邦の友人たちは喜んで自分の物を使ふ氣になつてゐる。その中の一人テバイのシミアスの如きは丁度この目的のために十分な金額を持つてやつて来てゐるし、ケベスやその他随分澤山の人たちもその積りであるのだ。だから、前にも言つた通り、君は、かういふ心配のために遁走を斷念してはいけない。又君は法廷で言つたやうに、此處を立退くことになれば全く途方に暮れるだらうなどと氣を腐らせることもやめにしたまへ。なぜと云へば、君が何處へ行つても到る處の人

テッサリヤ
Thessalia
(Thessaly)
ギリシヤ
の州名

人は君を歓迎するだらうから。若し又君がテッサリヤへでも行く氣なら、其處には僕の友人がある、彼等は大いに君を敬重し、安全に君を保護して、テッサリヤには君に不快な思をさせる者が一人もゐないやうにしてくれるだらう。もう一つ、ソクラテスよ、君がしようとしてゐる事は、僕には正しいとは思はれない、自ら救ふことが出来る癖に我と我が身を投出すといふことは。それは、君の敵が君を滅すために強行したいと思ひ、また實際強行しようとするやうなことを、君が自分で自分に強行するのだ。それに君は君自身の息子たちに背いて、君が扶養したり教育したりしてやる事が出来るのに、猶彼等を見棄て、去らうとしてゐるやうに、僕には思はれる。さうすれば、それが君に係る限り、彼等の運命はたゞ偶然のまゝに成

行くより外はなからう、さうして彼等はきつと普通孤兒が孤兒として出逢ふやうな目に出逢ふだらう。君は初めから子供をもたうとしないか、若しくは、その扶養と教育にともなつて來る困難を堪へしのぶかしなければならぬ筈だ。然るに君は一番樂な途を選んでゐるやうに僕は思ふ。寧ろ人は、徳があつて勇敢な人が選ぶやうな途を選ぶべきぢやなからうか、特に彼がその一生を徳の涵養に捧げると公言する場合には猶更のことだ。少くとも僕は、君のためにも、又君の友人である僕たちのためにも、恥づかしく思ふ。君に關する事件の全體の成行が、僕たちの側に於ける怯懦の結果であるかのやうな外觀を呈してゐるから。即ち第一、出なくても濟むのに君が法廷に出たことと云ひ、あの様な裁判の經過と云ひ、最後には全事件の嘲笑とも

謂ふべきこの結末といひ——僕たちが少しでも頼みになるものだつたら、十分出来もし、しおほせもされたものを、僕たちも君を救出さず君自身もそれをしなかつたのは、僕たちの側に於ける卑劣と怯懦とのためにこれを回避したからだと思はれるだらう。ソクラテスだから考へてくれたまへ、君にも僕たちにも不幸になり又不名譽になるやうなことがないやうに。どうぞ熟考してくれたまへ。——いやもう熟考の餘裕がない、もう決心してゐなければならぬのだ。而も策は唯一つあるだけだ、今晚中に萬事決行されなければならぬのだから、若し一寸でも愚圖くしてゐれば、それは不可能になり、おしまひになつてしまふ。だから、ソクラテス、萬事僕の言ふことを聽いて、違つたことをするのはよしてくれたまへ。

ソク 愛するクリトンよ、君の深切は大いに尊重に價する、若しそれが正しい道に叶つてゐさへするなら。だが若しさうでなかつたら、それが大きければ大きいほど益、堪へ難くなる。だから僕たちはさういふ行動をすべきであるかないかを考へて見なければならぬ。なぜと云へば僕は、今が始めてはなく前々から、理性的思考の結果最善と思はれるやうな主義以外は内心のどんな衝動にも従はない氣であるのだから。曩に僕の主張した諸主義は、今僕がこんな運命に陥つたからと云つて、之を抛棄する譯には行かない。寧ろ僕は今でもほゞ同じやうにそれを見てゐる。僕はこれまで通りに畏敬と尊崇とをそれに拂つてゐる。僕たちが現在の事情の下にあつてこれ以上のものを見出し得ない限り、僕は君に従ふことが出来なと思ひたま

へ——縦令多數者の暴力が、今よりもつとひどく我が黨をこは
がらせるために、幽霊で子供をおどかしてもするやうに、禁錮や
死刑や財産沒收に處するなどと我が黨を威嚇するにしてもだ。
そんならこの問題を考察するには、どんなにするのが一番ふさは
しからうか。先づ最初に、意見といふことに關して前に君が
主張した議論に立戻つて、意見の或ものは敬重すべく他の或も
のは敬重すべきではないと従來言つて來たことが、果してあら
ゆる場合に正しいかどうかを考へて見ることなどはどうだら
う。それとも、僕が死刑ときまる前はあの主張は正しかつたが、
今となつて正體を現して見れば、それはたゞ譯もないお饒舌で、
實際は戲談と空語とに過ぎなかつたのだらうか。クリトンよ、
僕としてはもう一度君と一緒にこれを研究して見たい、この主

張は、僕が今かういふ境遇に陥つたために別様に見えるか、それ
とも同様に見えるか、又僕たちはこれを拋棄すべきであるか、そ
れともこれを守るべきであるかを。思ふに自分の判斷に權威
を認める人たちは、如何なる場合にも、僕がたつた今主張したや
うに、世人の口にする意見の中で、一部のものには多くの價値を
置くべきであり、他には價値を置くべきでないと主張して來た
のだ。クリトンよ、神々にかけて、この主張が正しいと君には思
はれないか。君は、人間の思慮の及ぶ限りで云へば、明日死な
なければならぬやうな位置にある人ではない、従つて目前の不
運が君の判斷を惑はすやうなこともあるまい。だからよく考
へてくれたまへ、世人のあらゆる意見が尊重すべきではなく、唯
一部だけがさうであり、他はさうでないといふことや——又あ

らゆる世人のそれが尊重すべきではなく、一部の人のついてはさうであり他はさうでないといふ主張が君には理由があると思はれないかどうかを。君の考はどうだね。この主張は正當ではあるまいかね。

クリ正當だ。

ソクすると人は有益な意見を尊重して、有害なものを尊重してはいけないのだね。

クリさうだ。

ソクところが有益なのは智者のそれで、有害なのは無智者のそれではあるまいか。

クリきまつてゐるぢやないか。(プラトン 對話篇クリトン)

得能文

哲學者

東京高等師範學

校教授

文學博士

慶應二年(五三)

越中國生

五井蘭洲

江戸時代の儒者

で國學者

名は純禎

通稱は藤九郎

大阪の人

一時津輕侯に仕

へた

懷徳書院教授

寶曆十二年(西

三)歿

年六十六

一八 學の話

得能文

昔、徳川時代の儒者に五井蘭洲といふ人があつた。此の人の書いたものゝ中に左の如きことが載つて居る。

「或人の戯語に、人あり、曰ふ『讀書學問はよきことなれど、一の疵あり、身持をよくせねばならぬことなり、これ疵なり。』といふ、又人あり、曰ふ『讀書學問はよきことなれども一の疵あり、高慢になるが疵なり。』人又曰ふ『讀書學問はよきことなれど一の疵あり、貧乏になる、これ一の疵なり。』」

これは固より「戯語」に過ぎないのであらうけれど、當時の世間にはかやうな考を持つてゐた者もあつたのであらうし、又今日に於ても世間には同様に考へて居る者もあるであらう。我々には一笑にだも値せざることのやうに思はれるが、併しながら一

體學問といふものはどんなものであるかといふことになれば、初めに思うた程に容易な事柄では無いであらう。世間には屢々讀書と學問とを同一視したり、物議りと學者とを混同したりするのは、「一體學」といふことの如何なることであるかに就いて判然たる考が無いからであらう。

プラトーン

Platon
(前427—前347)
希臘の大
哲學者
ソクラテ
スの高弟

プラトーンが云つたやうに、人間の魂は常に本當のものを求めて止まない、幾度か蹉跌しながら屈せず撓まず本當のもの、眞實なるものを喘ぎ求めるのである。かくして眞實なるものを欣求するは、人間の衷情より發露するものであつて、何等か爲にするが如きものとは迥然として撰を異にして居る。それ故に眞に學にいそしむ心は、富貴功名によつて動かされる心とは別で

プラグマティス

Pragmatist
實用主義者
又は實際主義者
デューイ
John Dewey
(1859—)
米國第一
流の實用
主義的哲
學者

ある。富貴功名を輕蔑するといふのでは無いが、これを念頭に置かないのである。従つて貧乏もする。併しながら眞に參學實究の人にとつては貧乏もさほど苦にはならぬ。それよりも本當に欣求すべき價值があると思はれるものに向つて邁進して倦むことを知らないのである。學は學の爲に求むべきもので決して何等かの爲にすべきものではない。道德に就いても亦同じことが言はれる。道德は道德の爲にすべきもので、決して他のもの、手段になつてはならない。プラグマティストであるデューイですらも、此の事を痛論して、道德的行爲はそれ自らの爲に行ふべきであつて、他の目的の爲であつてはならない、例へば自分の修養の爲と思つてもならないことを説いて居る。愛國者は眞に愛國の熱情に驅られて愛國的行爲を爲すのであ

つて、これが自分の道徳的修養の爲だと思へば其の目的を誤る。其の他の徳に於ても同様であつて、それが自己の修養になるなどと思へば失敗に歸すると云ふのである。これは正しい考であると思ふ。

學に在つても其の通りであつて、本當のもの、眞正なるものを握みたいといふ已むに已まれぬ衷心からの要求に驅られて出てくるのである。決して何等か他の目的の爲に用ひられる手段ではない。他の目的の爲に爲すのは學の應用であつて、學そのものではない。例へば物理學を應用して機械を造るといふが如き場合は、初めから利用を目標にして居るのである。併しこれは決して學そのものではない。學は自由なる精神の自發的の行爲である。

程伊川
宋時代の哲學者
 程頤字は正叔
 大觀元年(一一七二)
 卒

年七十五

既に學は本當のものを握まんとする自由なる精神の自發的行爲なるが故に、學人と「物識り」とは異なつてゐる。「物識り」といふは博學多識の人であつて自發的に進んで研究すると云ふよりも、寧ろ他人の研究したものを雜然と摺集するものである。「物識り」は知識の所有者である。これに反して、學人はどこまでも進んで欣求するものである。「物識り」の器具は記憶力である、學人の器具は思索力である。「物識り」は既成の知識を貯へるものである、學人は心を虚しうして知識を求めものである。兩者は其の態度に於て全く異なつて居る。程伊川曰く「多聞識者猶廣儲藥物也、知所用爲貴」と、又曰く「學不貴博、貴於正而已」と。従つて讀書そのものは學では無い。固より讀書は先人の思想を知り、自己の趨向すべき所を知る爲に必要缺くべからざるも

のである。然れども其の爲に讀書を以て直ちに學と同一視することは出来ない。況してや漫然として多讀するに於ては、精神の自發性を妨げ、思索を攪亂せしめる恐がある。これ古來屢多讀が戒められた所以である。然れども選擇其の宜しきを得て讀書に沈潛することは、學そのもの、性質からして、善いことであり、貴いことである。これ昔から讀書を貴び、やがて學と同一視されるやうにもなつたのである。

學はそれ自ら目的であつて、他の目的の手段方便では無い。他のもの、手段ならば、學の價値は他のものに依存することになるであらうが、それ自らが目的であるとすれば、それ自身に價値を有するものである。而してそれ自身に價値あるものは眞に

富貴も

富貴不能淫
貧賤不能移
威武不能屈
此之謂大丈夫
(孟子)

呂叔簡

明代の儒者
名は坤
心吾と號す
性魯鈍刻苦して
遂に性理の學究
となる

價値あるもの、最も價値あるものである。眞に價値あるもの、最も價値あるものは尊嚴なものである。故に此の尊嚴なものに従事する學人は、やがて自ら持すること尊嚴ならざるを得ない。學人は富貴も淫する能はず威武も屈する能はざる底の氣概を具へるに至るのは當然のこと、謂はざるを得ない。然れども此の氣概は一面には謙虛である。眞の學人は常に眞理の前には謙虛でなければならぬ。之に反して、呂叔簡が言へるやうに、學進まずして汲々焉として毀譽を恤へ榮辱を憂へるが如きは眞の學人では無い。

學とは知識の體系である。而して經驗の範圍によつて知識の領域が分れるに従つて、學は次第に分化してそれらの特殊科

學は此の如く種々に分れるが、併し何れも皆學である、學たることの性質を持つて居るのである。此の學たることは經驗的事實では無くして、觀念的である、理想である。此の理想は特殊科學の指導原理である。而して學たることは理論の當爲によつて基礎づけられる、即ち論理的當爲によつて學が成立するのである。如何なる學でも、苟も學と謂はれる限りは、此處に其の根據を有して居る。而して知識は無限の過程である、從つて學は亦無限の過程であらねばならぬ。學人は此の無限の過程に於て無限の努力を爲すのである、又爲すべきである。(淺人零語)

師範國文 第一部用 卷八終

師範國文第一部用卷八

大正十四年十月廿七日印
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十三日修正再版發行
昭和五年八月三十一日修正再版發行
昭和六年一月二十五日修正再版發行
昭和六年一月二十八日修正再版發行

卷一	金六十九錢
卷二	金六十七錢
卷三	金六十三錢
卷四	金六十一錢
卷五	金五十九錢
卷六	金五十七錢
卷七	金五十五錢
卷八	金五十三錢
卷九	金五十一錢
卷十	金四十九錢



編者 吉田彌平
發行者 上原才一郎
發行所 光風館書店
印刷者 根本力三

東京市小石川區高田老松町五二番地
東京市神田區神保町一丁目五番地
東京市神田區神保町一丁目五番地
東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地
大日本印刷株式會社

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

六六六
五五五
四四四
三三三
二二二
一一一

三魚子西苑學友

三集
三
三



光風館書

田原本
本
次
三

Vertical text on the right side of the page, likely bleed-through from the reverse side or a separate column of text.



広島大学図書

2000054279



文庫

31

279